

地域交流活動報告書



平成30年度
杏林大学 地域交流活動報告書





全学的な地域志向化を進め 学びの場を提供する活動を積極的に展開

学長 大瀧 純一

本学が進めている地域交流活動は、医学部を母体とする総合大学としての特長を活かして、「健康・福祉」「にぎわい創出」「防災」「国際化」などさまざまな分野に渡っております。これらの遂行に関しては、地域交流委員会・地域交流課をはじめとする教職員の多大な努力はもとより、何よりも地域の皆さまの教育・研究・社会貢献活動へのご理解とご協力が必要であります。常日頃から、協働していただいている地域関係者、特に平成25年度に採択された文部科学省『地（知）の拠点整備事業』（以下、大学COC事業）に連携自治体として共に取り組んできた東京都三鷹市・八王子市・羽村市の皆さまに、心よりお礼申し上げます。

大学COC事業には「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合地の拠点」というテーマで5年間取り組んできました。この期間、事業を推進するために平成25年に設立した杏林CCRC研究所を中心として、「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」の3テーマを軸とした全学的な地域志向化を進めて参りました。また、本学関係者対象の活動のみならず、公開講演会実施件数の大幅な増加や「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム」の実施など、地域住民の方々を対象とした学びの場を提供する活動を積極的に展開しております。さらに平成27年度からは、『地（知）の拠点大学による地方創生推進事業』（COC+事業）の参加大学として、岩手県内の活性化に主に教育面から関わりを深めてきました。

本報告書は、本学の多様な地域交流活動について、平成30年度の全体像をお示しするものとなっております。できるだけ多くの方にご覧いただき、本学の地域交流活動をご理解いただくとともに、積極的なご意見をお寄せいただければ幸いです。

本学では、今後も地域との特色ある連携に力を入れて参りたいと考えております。なにとぞ引き続きのご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。



5年間の事業成果を踏まえ 地域交流活動のさらなる発展を目指す

地域交流推進室 室長 古本 泰之

本学では、全学的な『卒業認定・学位授与の方針』において、卒業時点までに獲得すべき能力のひとつとして「高い倫理観と社会的責任能力」（高い倫理観を持ち、規則を遵守し、地域社会の持続的発展のために、社会的責任を積極的に果たすことができる）を定めております。学生たちはこの能力を習得すべく、主にキャンパス周辺の地域で多様な活動を行っております。また、学生のみならず、教職員による研究・社会貢献活動も地域内で活発に展開されています。これらの活動の実施においては、地域社会の皆様方に多大なるご協力をいただいております。心より御礼申し上げます。

文部科学省『地（知）の拠点整備事業』による5年間の事業成果を概観致しますと、全学1年次必修科目『地域と大学』の設置完了など、教育の地域志向化に一定の実績を得られたことが最大の成果かと考えます。ただ、補助金による活動は、「遺漏のない実施」という点にスコープが当たりやすく、事業の終了とともに肝心の活動が収束してしまいがちという欠点があります。しかしながら、地域社会における課題をテーマとした教育活動や、大学が地域社会の活性化を支える「知的拠点」として果たす役割はさらに重要性を増してきています。そのような背景に加え、本学学生の地域での活動に対するニーズも高いことから、引き続き地域内各団体との連携を深め、活発に地域交流活動を行っていきたいと考えております。

また現在、岩手県を舞台とする『地（知）の拠点大学による地方創生推進事業』に、参加大学として関わっております。この事業の最終年度である令和元年度においては、事業終了を活動の終了として収束するのではなく、今後に関がる取り組みを展開することで、首都圏大学としての地方創生への関わり方について取り組み内容を深めて参りたいと思います。

本報告書をご一読いただき、事業終了後の活動の継続にさらなるご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

ごあいさつ	3
全学的な地域志向化を進め 学びの場を提供する活動を積極的に展開	学長 大瀧 純一
5年間の事業成果を踏まえ 地域交流活動のさらなる発展を目指す	地域交流推進室 室長 古本 泰之
地域を志向した教育活動	
① 1年次必修科目「地域と大学」	6
～地域における大学の役割を学ぶ～	
② 平成30年度「高齢社会における地域活性化 コーディネーター養成プログラム」開講	7
杏林CCRC 指定研究活動	
① 健康寿命延伸	8
がん患者と地域社会のための加齢等に関する研究	
② 災害に備えるまちづくり	10
東日本大震災からの教訓と米国ポートランドとの協業	
③ 岩手県における地方創生	12
東日本大震災被災地域での復興期活動における 内部人材・外部人材の活用・ネットワーク化に関する比較研究	
地域における研究活動	
① 障がい者スポーツボッチャを通じた 地域高齢者の健康増進運動としての効果	14
② 地域における子どもの虐待防止システムの構築	16
③ 東日本大震災による避難者に対する 運動実施状況について	18
地域における社会貢献活動	
① 精神に障害がある人の配偶者・パートナーへの支援	20
② 「学生が考えた駅からハイキング」プログラムの企画・運営	21
③ 災害に備えるまちづくり	22
④ HIV感染予防に関する情報の提供	23
⑤ 大学・地域関係機関による地域共生システムの構築 ～子供の居場所作りから学習支援プログラムへ～	24

⑥ 極低出生体重児の育児支援サークル「ぴあんず」	25
⑦ 花でとりもつ地域の『輪（和）』	26
⑧ 鎌倉浄智寺写真供養感謝祭の企画・運営	27
⑨ 医療系大学生による保育園でのいのちのおはなし会の実践	28
⑩ 少年期スポーツ外傷・障害の予防啓発活動	29
⑪ 三鷹市における健幸教室および体力測定の開催	30
⑫ 健康寿命延伸のためのスポーツ機会提供プログラム	31
⑬ 多胎育児支援活動「ツインズマーケット」の開催	32
⑭ アトレヴィ三鷹4 Fイベントスペースでの健康・運動相談活動	33
⑮ 「アトレヴィ三鷹店インバウンド需要に向けたおもてなし施策」 への言語協力	34
⑯ みたか知り隊ウォーク	35
⑰ 大学・地域関係機関による地域共生システムの構築 ～子どもの居場所作りを通して～	36
⑱ 「杏林CCRCフォーラム公開講演会」と 「第7回杏林CCRCフォーラム」を同時開催	37
■ その他の地域交流活動	38
地域との連携活動	
① 秋田県湯沢市・秋の宮温泉郷との 連携協定に基づく活動に参加	40
② 三鷹市・羽村市・八王子市との連携	41
■ 公開講演会・公開講座	44
COC+実績報告	
地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+） ふるさといわて創造プロジェクトの概要	46
① 岩手県滝沢市でのプレゼンテーションに参加 福島県相馬市で「フィールドスタディⅣ」を実施	47
② 平成30年度 COC+事業における取り組み	48
③ 平成30年度 杏林CCRC拠点推進委員会開催記録	50
④ 地（知）の拠点整備事業 平成29年度事業にかかる第三者評価報告書	52

本学では医学部、保健学部、総合政策学部、外国語学部の1年生全員が受講する必修科目「地域と大学」を開講している。
連携市（三鷹市・羽村市・八王子市）の職員、連携大学教員を招聘し、それぞれの地域の課題を学ぶ。
授業では4学部混成のグループに分かれて、グループワークを行うことを中心としたPBL形式の授業を通じて課題解決の手法の基礎を習得する。

授業回	日 程	学 部	形 式	内 容
1	4 / 6 (金)	保健学部 総合政策学部 外国語学部	講義	大瀧純一学長 挨拶 「地域と大学における学び」 古本泰之准教授
2	4 / 13 (金)	医学部 保健学部	講義	「三鷹市の健康福祉施策について」 三鷹市：健康福祉部保健医療担当部長 齋藤浩司氏
		総合政策学部 外国語学部		先輩のガイダンス 総合政策学部：柚木貴裕氏・佐藤純巨氏・田嶋克侑氏・林野一成氏 外国語学部：倉茂ほのか氏・清水美来氏・鈴木啓太氏
3	4 / 20 (金)	医学部 保健学部 総合政策学部 外国語学部	講義 グループワーク	コンセンサスゲーム「砂漠からの脱出」 朝野聡准教授
4	4 / 27 (金)	医学部 保健学部 総合政策学部 外国語学部	講義 グループワーク	「コンセンサスゲームによるグループ討議」 富田泰彦准教授
5	5 / 11 (金)	医学部 保健学部 総合政策学部 外国語学部	講義 グループワーク	「KJ法を体験しよう」 進邦徹夫教授
6	5 / 18 (金)	保健学部 総合政策学部 外国語学部	講義	「三鷹市の防災対策—現状と課題—」 三鷹市：総務部危機管理担当部長 大倉誠氏
7	5 / 25 (金)	保健学部 総合政策学部 外国語学部	講義 グループワーク	「災害への対応を考えよう！」 朝野聡准教授
8	6 / 1 (金)	保健学部 総合政策学部 外国語学部	発表・講評	グループワーク発表・講評 三鷹市：総務部防災課主査 今井信介氏 総務部防災課主査 朝倉雄平氏
9	6 / 8 (金)	総合政策学部 外国語学部	講義	「八王子の学園都市づくり～学生の地域活動～」 八王子市：市民活動推進部学園都市文化課 野口勇氏 市民活動推進部多文化共生推進課 櫻井哲希氏
10	6 / 15 (金)	総合政策学部 外国語学部	講義 グループワーク	「地域の国際化」 八王子市・グループワーク 安江枝里子准教授
11	6 / 22 (金)	総合政策学部 外国語学部	発表・講評	グループワーク発表・講評 八王子市：市民活動推進部多文化共生推進課 阿部田直樹氏 市民活動推進部学園都市文化課主査 野口勇氏
12	6 / 29 (金)	総合政策学部 外国語学部	講義	「羽村市における地域のにぎわい創出」 羽村市：産業環境部産業振興課主事 羽村綾那氏
13	7 / 6 (金)	総合政策学部 外国語学部	講義 グループワーク	「外国人観光客の誘致」 羽村市・グループワーク 原田奈々子教授
14	7 / 13 (金)	総合政策学部 外国語学部	発表・講評	グループワーク・発表・講評 羽村市：産業環境部産業振興課主事 羽村綾那氏
15	7 / 20 (金)	総合政策学部 外国語学部	講義	「地方創生への関わり」 岩手大学：小野寺純治特任教授 赤木徳顕特任教授 船場ひさお特任准教授

本講座の概要

平成30年度「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム」は、文部科学省の制定する学校教育法に基づく「履修証明プログラム」として実施している。対象者は社会人（市民）としており、総時間数120時間以上のカリキュラムを修了し、本学による認定を受けた者に対して履修証明書が授与されるものである。

このプログラムは、同じく文部科学省の「職業実践力育成プログラム」(Brush up Program for professional) にも認定されている。地域活動を行われている方や、今後さらに地域活動を深めたい、広げたいと考えている方が対象となり、地域振興やコミュニティに関する基礎知識や高齢社会における健康をめぐる諸問題について学ぶものである。本プログラムの履修を通して、地域活動に必要なファシリテーション能力や対人理解力、健康力アップ支援策を習得し、更なるスキルアップを目指して取り組むことになる。

本講座の開講式は4月1日に執り行われた。

履修生と学生による活動

7月から履修生と学生・教職員が一緒になり、地域の魅力を発信する活動として井の頭キャンパスにて打合せを重ねてきた。具体的なイメージと内容が固まった、9月25日から連携活動を本格的に開始。チーム名を「みたか知り隊」とし、大沢地区や野崎地区の農家農園・直売所の名所・旧跡をテーマとした企画の検討を進めた。

その後、度重なる打ち合わせを経て、翌年3月23日に杏林学生2名と履修生8名で大沢古民家～水車経営農家～出山横穴墓～国立天文台～星と森と絵本の家～美豊園を巡り、三鷹の大沢～野崎地区の田園風景を堪能した。三鷹市内で花卉栽培を営む農家の方に指導してもらい寄せ植えを体験するなど、一般参加者と履修生・学生等が一体となって行動できたと好評だった。

修了式

3月13日、井の頭キャンパスにて平成30年度「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成講座」の修了式が執り行われた。13名が修了し、履修生に履修証明書が授与された。その後、学長挨拶に続き、履修生を代表して仲西茂久さんより謝辞が述べられた。

「試験やレポート提出は大変だったが、特定テーマの勉強と学生さんと一緒に勉強できたことは貴重な体験だった」「今回学んだ事を1つでも実践に移し、地域活性的のために生かさなくてはならない」という声を聞いた。

また、修了式後には1年間を振り返る懇談会が学長を交え

て行われた。修了生からは「専門的な知識を得ることで実際の生活や仕事に生かされることがあり、また授業を受け下調べや復習をすることで普段の生活にはない脳の活性化や学ぶ楽しみがあった」、「日常や仕事以外の他分野について導入部分としてではあるが興味を持つきっかけになったのがなにより良かった」等、本講座が新たな学び・スキルアップに向けてのスタートになっているという前向きな意見を多く頂いた。

古本泰之地域交流推進室長からは、「知的財産の保持という面からも学び直しの機会を得られる本講座を受講していただき感謝している」と祝辞が述べられた。



開講式



みたか知り隊ウォーク



修了式

杏林CCRC指定研究活動

① 健康寿命延伸

がん患者と地域社会のための
加齢等に関する研究

■実施日：平成30年 5 月 1 日～平成31年 3 月31日
■担当者：長島 文夫 医学部 医学科 教授
古瀬 純司 医学部 医学科 教授
北村 浩 医学部付属病院 専修医
前野 聡子 医学部 医学科 実験助手

学術的背景と特色

【学術的背景】

超高齢社会を迎えて、高齢者のがんは増加している。しかし、老年腫瘍学という学問研究領域は本邦では未だ確立しておらず、本邦独自の文化社会的背景をも考慮した研究が望まれている。

そんな中、日本臨床腫瘍学会と国際老年腫瘍学会は、協力して老年腫瘍学教育プログラムを整備している。また、高齢者機能評価とそれに基づく介入の意義については、世界各国において重要性が認識されており、その意義を検証する試験が進行中である。本邦でも同様の研究を準備しており、実地診療への導入の工夫が求められている。このような老年腫瘍学関連の情報の整理、共有が重要である。

【学術的特色】

老年腫瘍学を専門に行う研究室は日本に存在せず、地域診療に根差しており、本邦初の取り組みである。

研究目的

本研究は、健康寿命延伸を目標に、北多摩地区等における健康社会を構築することを目指す。

具体的には、がん患者と地域社会のための、加齢等に関する以下の3つのプロジェクトを推進することを目的とする。

(1) 老年腫瘍学教育プログラムを本学の教育プログラムに

反映

(2) 高齢者機能評価に基づく個別化医療を推進するための介入法の実施可能性試験

(3) 老年腫瘍学に関連する情報を整理し、老年腫瘍学研究室としての機能を構築

研究内容

(1) 老年腫瘍学教育プログラムを
本学の教育プログラムに反映

日本臨床腫瘍学会の老年腫瘍学ワーキンググループと国際老年腫瘍学会が協力して、老年腫瘍学の教育プログラムを整備している中で、高齢者のがん医療を担う医療従事者（医師、看護師、薬剤師等多職種）に向けて、平成30年3月に「第1回老年腫瘍学セミナー」を、平成31年3月21日（木）に「第2回老年腫瘍学セミナー」を開催した。それらの経験を参考にし、本学医学部学生の教育に必要な内容に再構成した。

(2) 高齢者機能評価に基づく個別化医療を推進する
ための介入法の実施可能性試験

高齢者機能評価に基づいた介入の意義について、各国において検証試験が進行中である。本邦でも同様の研究を準備しており、本年度は介入法を提案し、その実施可能性試験を行う予定であった。

しかし、当初計画していた臨床試験は、施設の整備およびシステム構築に大きなリソースを割く必要があるため、本年度は中止として、高齢者機能評価の次世代システムの開発へシフトすることとした。具体的には、以前よりCCRC研究所で情報共有を進めていた岩手八幡平のオークフィールド八幡平（サ高住）において、iPhone・Apple Watchを活用した見守りサービスについて準備を開始した。

(3) 老年腫瘍学に関連する情報を整理し、
老年腫瘍学研究室としての機能を構築

老年腫瘍学等に関連する情報を探索・整理し、協力する体制を強化した。

- 「高齢者がん診療指針策定に必要な基盤整備に関する研究」により、高齢がん診療Q&Aを準備したので、国内外のガイドラインを参考にしながら情報を集約した。
- 平成30年7月23日（月）、セミナー開催。

◇「Tobacco & Cancer Treatment Outcomes」
（WHO/IARC・十川佳代先生）

IARCで取り組んでいる喫煙によるがんリスクに関する疫学的研究プロジェクトについてお話しいただいた。禁煙は国際的にみても難しいことであるが禁煙したままの患者に比べ、再度喫煙した患者では、死亡率や再発率が2～3倍高いという結果が示された。医師らは今後喫煙患者に対し、禁煙サポートを積極的に行う必要があることが提案された。

◇「カンボジアで医療戦略を科学する」（国立がん研究センターがん対策情報センターがん臨床情報部研究員・岩本桃子先生）

平成28年から2年間、国境なき医師団からカンボジアへ派遣。従来のC型肝炎治療に対し、リソースが限られるカンボジアでいかに効率よく、多くの方の治療を行ったか、公衆衛生学による実例を解説いただき、超高齢化の日本の社会保障に対する考え方につながっていく講演となった。

- 平成30年7月30日（月）、東京女子医科大学がんセンター長・林和彦先生による「今、学校現場で始まる『がん教育』」講演会開催。

次期、学習指導要領に学校で「がん教育」を行うことが明記され、医師やがん経験者を外部講師とすることが予定されている。「がん教育」では、①がんについて正しく理解するという知識の教育、②健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにするという意識の教育が必要という2大目標を掲げ、がんを通じた健康教育を行っていくことが重要であることをご教授いただいた。

- 平成30年8月31日（金）～9月1日（土）、福岡国際センターにて開催された第3回日本がんサポーターブケア学会学術集会で発表。

◇「Gemcitabine base の化学治療を行った高齢者肺がんにおける有害事象と高齢者機能評価について」（北村浩）

◇「海外高齢者がん診療ガイドライン活用の工夫～認知症をもつがん患者の実施症例から～」（前野聡子）

- 平成31年2月23日（土）、杏林CCRCフォーラム公開講演会を開催。

◇「モルヒネを使ったらおしまいってホント?! ～心と体の痛みを和らげる緩和医療について、モルヒネなどの麻薬系のお薬のメリット・デメリット 他～」（北村浩）

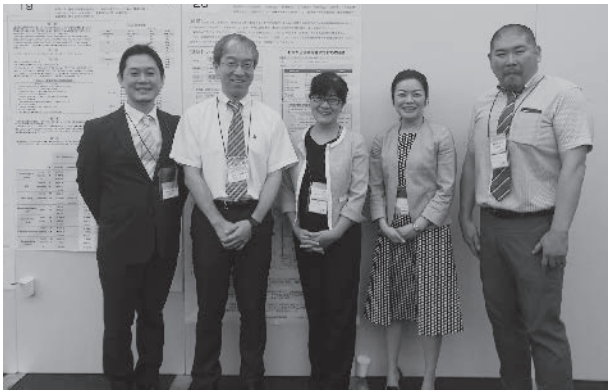
◇「超高齢者とがん、杏林CCRC研究所の取り組み～超高齢がん患者に対する治療、高齢者の見守りサービス、杏林CCRC研究所の取り組みについて 他～」（長島文夫）

研究結果

(1) については、再構成した老年腫瘍学教育プログラムを本学医学部学生の教育プログラムに反映し、腫瘍学講義において「高齢者のがん医療」として盛り込んだ。また、さまざまなフィードバックがあるので、次年度もセミナーを行うとともに、一般市民へも高齢者がんに関する見識を広めるために工夫を重ねる。

(2) の見守りサービスというのは、市販の機器（現在は、iPhoneとApple Watch）を活用したアプリにより、心拍数、睡眠の質等のデータを常時記録し、さらに転倒など異常が発生した場合には、家族や医療者に連絡して高齢者の見守りを行うシステムである。これは、データを蓄積して解析することにより、脳梗塞の予兆検知、高血圧や糖尿病などの生活習慣病の発症や重篤化の予防、がん治療の副作用確認などに活用することが可能である。今後は、プレジジョンメディシン（予防、多様性、ゲノム）構築や高齢化が進む地域の医療業務、行政コスト等の効率化など、包括的な相乗効果を目指して開発を進める。

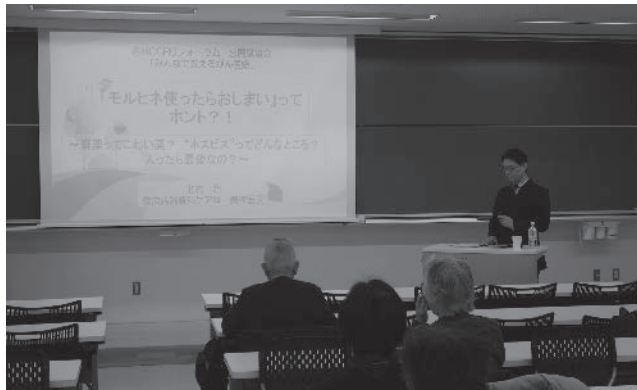
(3) については、〈高齢者がん診療の基本的な考え方（案）〉を用意し、暦年齢の考え方、高齢者機能評価などの客観的な方法での評価、意思決定支援の重要性などを盛り込んだ。次年度は、医療者だけではなく幅広く意見を取り入れながら、国民の意見と協調できるようにブラッシュアップし、多摩地区での意見交換会の開催やがん教育にも反映していく考えである。



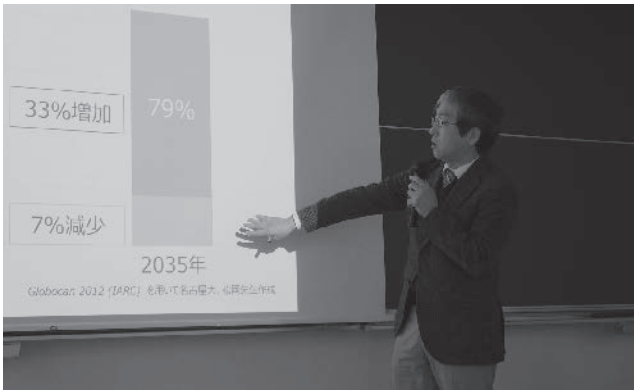
日本がんサポーターブケア学会学術集会



見守りサービス（AP Tech社）ミーティング



杏林CCRCフォーラムの公開講演会



東日本大震災からの教訓と
米国ポートランドとの協業

■実施日：平成30年 5 月 1 日～平成31年 3 月31日
■担当者：三浦 秀之 総合政策学部 総合政策学科 准教授
佐々木秀之 宮城大学 准教授
西芝 雅美 ポートランド州立大学 教授

背 景

本学はポートランド州立大学とMOUを締結しており、相互の交流を深化させるうえでは、研究における相互交流が1つのきっかけになることが考えられる。そこで、昨年度より実施しているのが、日本とポートランドがともに災害に備えるまちづくりを学び合うことを目的とした、東日本大震災の教訓を学ぶためのプログラムである。

ポートランド州立大学のあるオレゴン州では近い将来、大地震の発生が予想されるということが、平成28年に米国連邦政府が発表した報告書に記載された。それを契機に、ポートランド州立大学の研究機構であるパブリックサービス研究・実践センターの研究所として、伊藤教授が率いるInitiative for Community and Disaster Resilience (ICDR) という研究所が設置された。これは災害とコミュニティに特化した研究所であり、その設置を機に震災を含む災害に関する興味関心が高まっている。

そこで、ICDRと本学は“Learn From Each Other”を理念に掲げ、前記のプログラムを実施し始めたのである。なお、このプログラムは5年間継続的に実施する予定である。

研究目的

本研究の目的は、東日本大震災において「自助」「共助」「公助」がいかにして機能したのかを掘り下げるとともに、これ

から震災が起こる可能性が高い地域では、それらを機能させるためにいかなる対応がなされているのかを考察することにある。その目的は、本学が進めるCCRC研究所における「災害に備えるまちづくり」という目的と合致していると考えられる。

研究内容

今年度の視察では、東日本大震災の被災地である石巻と本学がある三鷹において、首都直下型地震に備えるまちづくりについてフィールドワークを共同で実施した。また、三浦が8月にポートランドを訪れ、現地の防災担当者と意見交換を行い、日本における知見を互いに学び合うことを検討した。

初日 石巻市でのフィールドワーク

石巻市河北総合支所の地域振興課長・万城目昭博氏からは「石巻市河北地域の被災・復興状況」について、二子地区まちづくり協議会の阿部良助会長からは石巻市最後の防災集団移転団地となった二子団地における合意形成などについて、それぞれお話を伺った。その後、多くの犠牲者を出した石巻市立旧大川小学校を訪問し、「石巻市の非可住地区における復興と水産業」というテーマのもと、尾の崎地区の神山庄一自治会長から説明を受けた。さらに、「みやぎ防災教育副読本（中学校）」の編著者でもある石巻市立河北中学校教頭の遠藤貞悟教諭から、東日本大震災を受けて防災教育がどのように変化したのかなどについてお話を伺った。

2日目 石巻市でのフィールドワーク

平成30年5月31日に完成したばかりの石巻防災センターにて、石巻市の阪井聡至復興担当審議員より冒頭に挨拶を受けた。その後、石巻市危機対策課の木村伸事業推進官（震災時

は防災対策課長）より「石巻市の東日本大震災時における初動対応」、石巻市復興政策課の岡浩課長より「石巻市の被災および復興状況」について説明を受けた。

3日目 三鷹市でのフィールドワーク

まず始めに、松田剛明副理事長とポール・スノードン国際交流センター長からの歓迎挨拶があった。続いて、古本泰之外国語学部准教授・地域交流推進室長から「杏林大学を含む首都圏の大学の防災対策への取り組み」について、三鷹市立高山小学校避難所運営連絡会の小高格氏と福井秀和氏から「三鷹市の高山小学校における避難所の運営」についてレクチャーが行われた。

午後からは、三鷹市役所総務部防災課の今井信介主査の案内のもと三鷹市立第一小学校の防災倉庫を視察し、同市役所総務部の大倉誠危機管理担当部長と今井氏から「東京都三鷹市における防災」というテーマで説明を受けた。その後、本学医学部付属病院高度救命救急センターに場所を移し、「杏林大学病院の災害医療」というテーマで同センターの大田原正幸助教と守永広征助教から説明を受けた。

4日目

振り返りを行い、フィールドワークは終了となった。本フィールドワークはポートランド州立大学と共同で実施予定であり、引き続き共同研究を遂行予定である。

研究結果

本研究プロジェクトは、杏林大学CCRC研究所、宮城大学、ポートランド州立大学の共同プロジェクトであり、フィールドワークを主としている。日本側は東日本大震災の被災地および首都直下型地震に向けて災害に備えるまちづくりを実践している東京において、米国側は今後の大地震の発生確率が高まっているオレゴン州ポートランドにおいて、主体となるアクターへのヒアリングや意見交換を行い、それを通して災害に備えるまちづくりの知見をためるだけでなく、実践的な試みへとつなげることを企図している。

大災害が生じた時、個人と家族および行政だけで救出救助、避難介助や災害避難所の開設と運営などが担えるものではない。ご近所同士の地域を単位とした「共助」の対応行動がな

されることが、我が国の大災害後の「地域コミュニティ」の特徴といえる。

東日本大震災後、災害に向き合うアプローチとして「減災」という言葉が広く聞かれるようになった。「減災」は、平成7年の阪神・淡路大震災後の被災地復興と日本各地での災害対策の再構築の中で確立されていったアプローチである。

減災については、その担い手としてのステークホルダーという視点を欠かすことができない。阪神・淡路大震災の被害要因の解明と復興事業の進展に伴い、防災対策及び災害対応の課題が明確になってきた。これまでは行政が災害発生時の課題対応の「主体」として重視されていたが、阪神・淡路大震災を機に公的セクターの担い手も重視する「自助」・「共助」・「公助」という概念が生まれた。

災害時に自らを守る「自助」、近隣で互いに助け合う「共助」、公的機関による支援の「公助」が互いに連携して一体となることで被害を最小限にとどめることができるとともに、早期の復旧・復興にもつながると考えられる。中でも「共助」、すなわち地域コミュニティが担う役割は大きいと考えられる。

本研究では、東日本大震災において「自助」「共助」「公助」がいかにして機能したのかを掘り下げるとともに、これから震災が発生する可能性が高い地域ではそれらを機能させるために、現在いかなる対応がなされているのかを考察できたのではないかと考える。



付属病院内の見学



石巻市でのフィールドワーク



三鷹市のレクチャー



三鷹市でのフィールドワーク



本学関係者とポートランド州立大学の学生

杏林C CRC指定研究活動

③ 岩手県における
地方創生東日本大震災被災地域での復興期活動における内部人材・
外部人材の活用・ネットワーク化に関する比較研究

■実施日：平成30年5月1日～平成31年3月31日
■担当者：古本 泰之 地域交流推進室 室長
井上 晶子 地域交流推進室 特任講師
依田 千春 地域交流課 課長
小野寺純治 岩手大学 特任教授

学術的背景

平成23年3月に発生した東日本大震災（以下、震災）から8年が経過した。被災地では、震災以前より少子高齢化による過疎の進行や、地域内主幹産業の停滞などの地域課題を抱えていたが、震災の発生によって衰退の流れに拍車がかかったといえる。一方で、この震災を契機として、各地では「復興」から「日常」に向かうためにさまざまな取り組みが行われており、その紹介や活動成果の分析といった研究面での蓄積も進んでいる。それらの研究には、防災・減災を目的としたハードウェア的視点からのものだけではなく、個別の復興活動の事例紹介や取り組みにおけるキーパーソンの動き、地域内の新たなソーシャルキャピタル形成など、ソフトウェア的な視座から取り組んだものもあり、幅広い学問分野からのアプローチがなされている。

ただ、8年間の経過する中で、個別の地域・組織の取組分析は十分に積み重なってきており、複数の事例を整理・比較した研究が必要な段階に入っているといえる。上述した「ソフトウェア的な視座」からの研究としては、震災を契機とした地域内関係者のネットワーク化プロセス、補助費制度による外部人材の活用（の手法とその結果）などが事例として想定される。個別地域の状況を詳細に調べた上で複数の地域を比較することを通じて、類型（モデル）化と各類型における

メリット・デメリットの整理が可能となり、災害からの復興活動により資する成果に繋がっていくと考えられる。

研究の全体構想と具体的な目的

本研究は、各震災地域の復興活動における人材についての研究に、「震災後に内部人材と外部人材の連携によって成立した新たな人的ネットワーク」という視点をもたらすことを全体目的として設定した。そのため、個別地域での活動人材の状況把握を踏まえた地域間比較を行い、復興プロセスにおける諸般の活動を支える人材とそのネットワークの特徴について整理した。

条件面で大きな差がある地域を比較するのは妥当ではないことから、「人口規模」「地理的条件」「震災による被害と復興状況」「震災以前の主幹産業の状態」などの視点から検討した。概ね状況が類似しており比較対象になりうる地域と判断し、岩手県釜石市・福島県相馬市を研究対象として設定した。

その上で具体的な目標として以下を挙げた。

- ①岩手県釜石市の復興プロセスにおける外部人材活用の経緯と内部人材との連携の現状と課題を明らかにする。
- ②福島県相馬市松川浦地域の復興プロセスにおける外部人材・内部人材間の連携における現状と課題を明らかにする。
- ③両地域の結果比較を通じた、震災地域の復興活動における外部人材の活用・内部人材との連携モデルの類型化と個別モデルの課題を提示する。

研究内容

実施責任者（古本）および分担者（井上）が取り組んでき

た既往の研究・教育実践の成果を踏まえ、平成30年度の具体的な活動を以下のように設定した。

- ①既存研究および資料（新聞・雑誌記事など）の収集・分析
- ②釜石市・相馬市における「復興活動」に携わる関係者・組織へのヒアリング調査
- ③上記①②の成果を踏まえて、福島県相馬市で復興をテーマとした学生実習「フィールドスタディⅣ」を企画・実施した。その引率において古本・井上が行ったインタビュー調査・参与観察の内容も、研究成果の一部として追加した。

研究結果

平成30年度の研究活動の結果は以下のように整理することができる。

（１）調査結果

●両地域の共通点：「交流人口増加」への取り組み

釜石市・相馬市いずれも、「交流人口」増加に向けて取り組んでいる。

釜石市は鉄鋼業が地域経済の中心にあったが、その主たる企業の撤退による経済面での衰退に震災が拍車をかけたため、新たなコンセプトとしての「交流人口増加」（「観光者の増加が目的ではない」としている）に着手している。相馬市も地域経済の大きな部分を占める漁業を東日本大震災によって「喪失」した。その影響は魚を軸としてきた観光関連産業にも及んだ。そこで、漁業に関する新たな取り組みを通じた観光業の再生、つまり交流人口増加を目指す活動が企画され、地域内の主体による連携が創出されてきた。

また、東日本大震災による地域の衰退加速は、地域内にあった旧来の人的ネットワークとその秩序を書き換える機会となっており、特に40歳代前後の地域関係者にとっては新たな振興活動に向けた「チャンス」となっている点は注目すべきである。

●両地域の相違点：人材活用・連携のあり方

一方で、取り組みにおける人材活用・連携のあり方は両地域で全く異なるアプローチを取っていることが本研究によっ

て明らかになった。釜石市は行政主導で震災復興に関する補助金を用いて外部人材・組織を大量に地域内に導入して多くの新事業を起こさせる取り組みをしている。一方で、相馬市は行政がハードウェアの復旧活動を中心的に進める一方で、震災を契機として各産業関係者が中心となった内部人材による異業種間ネットワークの再構築と強化が進み、再生に向けた事業に中心となって取り組んでいる。外部者は少なく、その活動も限定的な状況にある。

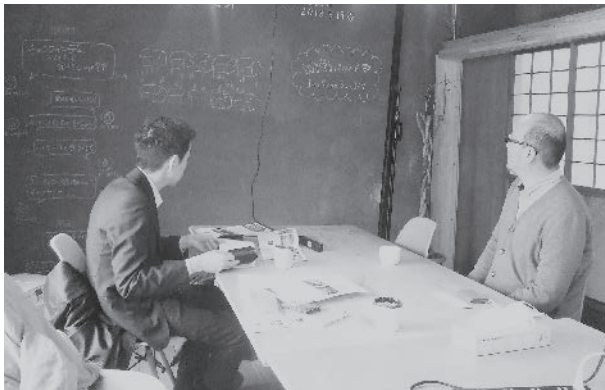
（２）今後の展開

震災後のソフトウェア的研究においては、地域内のソーシャルキャピタル形成の重要性を指摘するものや、各地域の人材活用事例紹介が積みかさねられてきた。本研究においては、それらを踏まえて相馬市・釜石市の状況を細かく調査することを通じて、「人材」には「内部」「外部」の区分が存在すること、行政が考える人材活用のあり方には地域差があり、その影響を受けて人的ネットワークのあり方にも多様性が生じていることが明らかになった。

東日本大震災に関する国による財政的支援は令和2年度で終了することが予定されている。これまでの復興活動においては費用を外部からの支援で賄うことがほとんどであったが、日常への回帰に依然として課題がある中で、これからは自主財源で活動していくことが求められる。そのような大きな環境変化の中で、全く違ったアプローチで復興活動における人的ネットワークを構築してきた両市の成果と課題を継続的に分析していくことは、危機的地域のレジリエンスや、人的ネットワークのあり方を考える上で大きな示唆をもたらすものと考え、今後も研究に取り組んでいく予定である。また、そのような地域における「大学教育の在り方」についても、実習の実施と成果検証を通じて引き続き明らかにしていく。



外部人材の拠点の一つ「創作農家こすもす」（釜石市）



「釜石大観音仲見せりノベーションプロジェクト」の活動拠点



相馬市「伝承鎮魂祈念館」



相馬市で実施した学生によるヒアリング調査

地域における研究活動 ①

障がい者スポーツボッチャを通じた地域高齢者の健康増進運動としての効果

■実施日：平成30年12月22日（土）、平成31年1月12日（土）
■担当者：一場 友実 保健学部 理学療法学科 准教授
菊池 佑維 千葉リハビリテーション病院 理学療法士

背景

ボッチャ（Boccia）競技は、脳性麻痺者や上位頸髄損傷者を中心とした重度四肢麻痺者が参加できるターゲットスポーツである。2016年リオデジャネイロパラリンピック大会で、日本選手が団体戦で初の銀メダルを獲得し、2020年東京オリンピック・パラリンピック大会でもメダルの獲得が期待されている競技の1つである。

ボッチャ競技にはPara-Bocciaとi-Bocciaという2つの方向性がある。Para-Bocciaは、パラリンピックなどでのメダル獲得に向けた選手強化を目指すものであり、3年前から選手の身体評価、トレーニングを実施している。また、支援学校の生徒を対象にしたボッチャ甲子園を開催し、選手の発掘も行っている。それに対して i-Bocciaは、障がい者スポーツから一般化し、ボッチャ競技の普及を目指すものである。

本活動では、平成27年度に地域活動の助成を得て、障がい者スポーツの普及・参加支援として、パラリンピアンを招聘し、三鷹市民を対象にボッチャの普及活動を行った。平成29年度には、障がい者スポーツボッチャを通じた地域のスポーツボランティアの育成という研究課題で助成をいただき、三鷹市民への介入を行った。その結果、ボッチャのスポーツボランティアを行いたい、継続的なボッチャグループを立ち上げたいという方も出現し、実際に高齢者のボッチャクラブの立ち上げに至った。

現在では、市も承認の「ボッチャの輪を作ろう会」という



競技説明

グループが立ち上がり、月に4～5回さまざまな場所でボッチャのスポーツボランティア・競技普及を行ってけている。

研究目的

今年度の活動は、ボッチャ競技のさらなる普及・発展に力を入れると同時に、ボッチャが地域高齢者の健康増進運動として効果が認められるか、また精神・心理面へ影響を与えるか、多角的に検討を行うことが目的である。

研究内容

高齢者へボッチャ競技を導入する利点として、①車いすや歩行困難者でも参加が可能であり安全性が高い、②様々な戦略を駆使する知的活動の促進、③楽しい・面白いなど心理面への影響、④活動性の向上・社会交流の増加、などが挙げられる。

今回の活動では、実際にボッチャを体験してもらい、体験の前後で身体面・心理面に影響が認められるか、またストレスの改善などに有用であるか検討を行った。

対象は、自主的に参加を表明したサービス付き高齢者住宅に入居している16名のうち、体験前後のデータが取れた女性12名、平均年齢は81.7±4.54歳であった。

対象者には、まずスライドを使用しボッチャ競技の歴史やルールの説明を行い、デモンストレーションの見学後、実際に競技を体験してもらった。

具体的な評価項目と評価方法は、以下のとおりである。

1. 唾液アミラーゼ活性によるストレス評価

唾液アミラーゼ活性値の減少はストレスの低下を示すもの



実際のボッチャ体験

と考えられている。交感神経活動が増すと唾液アミラーゼ活性値が上昇することから、交感神経活動のストレスを判定する基準として採用した。

唾液の採取にあたり、唾液アミラーゼ式交感神経モニター（NIPRO社製）と専用のチップを用いた。唾液採取チップの先端部を舌下に入れ舌下部から直接唾液を採取し、30秒後に口腔粘膜に触れないよう取り出し、唾液を採取したチップを唾液アミラーゼ式交感神経モニターに差し込み測定を行った。体験前後で2回ずつ測定し平均値を採用した。

2. POMS 2（Profile of Mood States 2nd Edition）日本語短縮版による気分調査

POMS 2 日本語版による気分調査は自記入式検査法であり、対象者に35項目の質問に対して「まったくなかった」（0点）から「非常に多くあった」（4点）までの5段階（0～4点）のいずれかを選択し検査用紙に記入してもらった。

この気分調査は7種類の感情尺度が35項目で表現されている。各尺度の素得点を計算後、素得点からT得点（標準化得点）を算出した。POMS 2の感情尺度とは、怒り - 敵意（AH）、混乱 - 当惑（CB）、抑うつ - 落ち込み（DD）、疲労 - 無気力（FI）、緊張 - 不安（TA）、活気 - 活力（VA）、友好（F）の7尺度である。総合的気分状態（Total Mood Disturbance: TMD）は、値が高いほど心理的ストレスが高い状態を示すものと考えられており、ネガティブな気分状態を総合的に表している。

3. 老年期うつ病評価尺度（Geriatric Depression Scale 15：GDS15）によるうつ病評価

抑うつのスクリーニング検査として使用されている自記入式検査法である。質問は15項目からなり、「はい、いいえ」で回答してもらい、総合得点で0～4点が正常、5点以上がうつ傾向、10点以上がうつ状態と定義されている。

4. 左右の片脚立位保持時間

体験前後で左右各2回ずつ測定し、その平均値を採用した。

5. 30秒椅子立ち上がりテスト（30-seconds chair-stand test：CS-30）

高齢者の下肢筋力を簡便に評価する方法として採用した。椅子からの立ち～座りで1カウントとし、30秒間で何回できるかを測定するもので、体験前後で1回ずつ実施した。

6. 握力

体験前後で左右各2回ずつ測定し、左右の大きい方の記録の平均値を採用した。

統計学的処理にはSPSS（Windows版 ver.21.0, SPSS）を用い、体験前後での各項目に対対応のあるt検定を行った。

研究結果

ボッチャ体験前後でのPOMS 2のT得点の結果を表1に示す。今回の結果では、ボッチャ体験後にネガティブな気分状態を表すTMDは低値を示し、ポジティブな気分状態を表すVA（活気 - 活力）、F（友好）は高値を示した。これにより、ボッチャ体験によって活気 - 活力、友好のポジティブな気分状態は増加し、逆にネガティブな気分状態は減少することが認められた。

体験前後での唾液アミラーゼ活性・GDS 15・片脚立位保持時間・CS-30・握力の結果を表2に示す。

唾液アミラーゼ活性値は、体験前後で上昇したのは6名、減少したのも6名であり、ボッチャ体験によるストレスの増加は認められなかった。また、GDS15は、体験前にうつ傾向との判定は1名、うつ状態との判定は1名であったが、体験後は2名ともがうつ傾向となり、ボッチャ体験によるうつ状態の増悪などは認められなかった。片脚立位保持時間、握力にも有意な差は認められなかった。

CS-30は体験前後で17.7回から19.9回と有意に増加が認められた。CS-30は高齢者の下肢筋力を評価するもので、転倒予測のためのcut off値は14.5回との報告もあり、ボッチャが転倒リスクの軽減に影響を与える可能性も考えられる。

以上のことより、ボッチャによる介入がシニア世代の身体面・心理面の改善に影響を与える可能性が示唆された。今後、さらなる検討を行っていきたいと考える。

表1 ボッチャ体験前後でのPOMS 2 T得点	Before	After	p value
TMD	42.4±5.65	39.8±7.20	0.046*
AH	43.1±5.98	42.1±7.89	0.519
CB	46.0±6.53	44.3±8.82	0.25
DD	46.9±4.56	45.3±6.36	0.279
FI	42.6±5.60	40.5±6.14	0.236
TA	44.8±8.78	42.6±7.28	0.453
VA	59.1±10.4	63.8±7.28	0.05*
F	52.5±8.75	56.9±8.89	0.026*

TMD：総合的気分状態
AH：怒り - 敵意
CB：混乱 - 当惑
DD：抑うつ - 落ち込み
FI：疲労 - 無気力
TA：緊張 - 不安
VA：活気 - 活力
F：友好
Data presented as mean ± SD.
*p<0.05

表2 ボッチャ体験前後での唾液アミラーゼ活性・GDS15・片脚立位保持時間・CS-30・握力	Before	After	p value
唾液アミラーゼ活性 (KU/L)	22.2±21.2	35.5±39.5	0.44
GDS15	2.58±3.40	2.08±3.42	0.352
右片足立ち (sec)	25.4±21.7	31.4±22.0	0.111
左片足立ち (sec)	19.0±17.0	27.4±20.8	0.09
CS-30 (times)	17.7±4.60	19.9±3.00	0.009*
握力 (kg)	17.8±2.91	17.7±3.12	0.88

Data presented as mean ± SD.
*p<0.05

地域における
研究活動 ②

地域における子どもの虐待防止システムの構築

■実施日：平成30年 8 月29日（水）、平成31年 3 月29日（金）
■担当者：楊 國昌 医学部 医学科 教授
保崎 明 医学部 医学科 准教授
加藤 雅江 医学部付属病院 患者支援センター 課長

背 景

児童相談所が対応する子どもに対する虐待の件数は、平成28年度に12万件を超え、その数は年々増加し続けている。本学園では、平成11年に虐待防止委員会を立ち上げ、以後、各種マニュアル、フローチャート、スクリーニングシートを作成してきた。近年では、年間1000件を超える対応を行い、虐待が重症化することを防ぎ、子どもが安全に育つことができるよう環境調整を目的に支援を行っている。

このような支援を本院単独で行うことには限界があり、他の医療機関、関係機関との連携が不可欠となってきた。そのため、本委員会では連携を強化し、虐待防止に関する知識を得るために年間6回の勉強会を開催してきた。しかし、その間も虐待の件数は増え続け、家族背景・課題も複雑化し、対応する専門職者にも多くの知識、経験が必要とされるようになってきている。

そのような状況の中で、ネットワーク構築の重要性を感じ、平成26年に多摩地域の小児科を有する医療機関が集まり、多摩CPT*ネットワークを立ち上げるに至った。都立小児総合医療センター、東海大学付属八王子病院、本院が幹事となり、22～25医療機関が参加した。ちなみに、参加職種は医師、看護師、ソーシャルワーカーである。

また、平成27年からは毎年、年4回の集まりを持ち、虐待の見落としを防ぎ、適切な対応が可能となるようネットワークの在り方を模索し、活動している。

※CHILD PROTECTION TEAM：病院内子ども虐待対応チーム

研究目的

立ち上げから4年が経過し、各医療機関により虐待防止に対する考え方に温度差ができています。また、介入事例の質・量にも差異が生じています。

そこで、ネットワークを活かした虐待防止システムが機能的に働くような活動を企画し実施する。

【具体的な活動】

(1) 講演会を企画・開催することで、広く多くの医療機関において虐待の見落としがなくなり、虐待の深刻化を防ぐことが可能となるような啓発活動を行う。

(2) アンケート等により各医療機関の虐待防止に関する意識について調査を行い、どのようなサポートがあれば効果的な虐待防止の取り組みが可能となるかを検討する。

研究内容

2回の講演会を企画・実施し、虐待防止に関わる各専門職の動機づけを行った。

平成30年 8 月29日（水）

横浜市立大学法医学教室の井濱容子教授を招き、都立小児総合医療センターの副院長・田中哲先生を座長に講演会を開催した。テーマは「法医学から見た子どもの虐待」と「損傷の診かた・受傷機序の考え方」などだった。

参加者はCPTスタッフ29名、本院のスタッフ34名、計63名だった。

平成31年 3 月29日（金）

三鷹市役所母子相談員、日本こどもの虐待防止センター理事・佐伯裕子先生の講演を行った。あわせて本院の虐待防止活動についての年間報告を行った。

参加者はCPTスタッフ37名、本院のスタッフ11名、計48名だった。

研究結果

講演会終了後のアンケート調査の結果、各医療機関の現状および院内での虐待防止活動の仕組み、活動を行う上での課題について確認できた。たとえば、院内に虐待防止委員会や支援チームがあり、定期的に部会が開催されている医療機関の割合が大きかった。とは言え、支援チームはあるものの、機能していない医療機関も多く、それらに対しては多摩CPTネットワークとしての支援を検討しなければならないと考える。

虐待のケースがあれば、チェックリストでスクリーニングされ、緊急性をチームで検討することができている反面、ネグレクト、心理的虐待が見落とされていることに対する危機

もうかがえた。また、地域関係機関との連携が不十分であり、虐待防止に対する取り組み方に温度差、地域間の格差を感じている医療機関が多く、今後は関係機関との連携が不可欠になる。その方法については、次年度以降に継続検討していく。

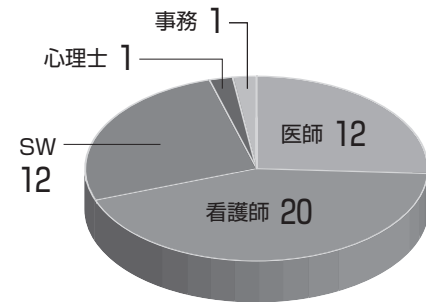
さらに、児相通告後の支援経過が共有できていない事例が多く、今後は再統合も含め医療機関が果たすべき役割を模索していくことが課題となっている。

講演を聞いての感想としては、ネットワークの実際や様々な取り組み事例、専門家からの見立て等を学ぶことができた

平成30年 8 月29日 講演会開催報告

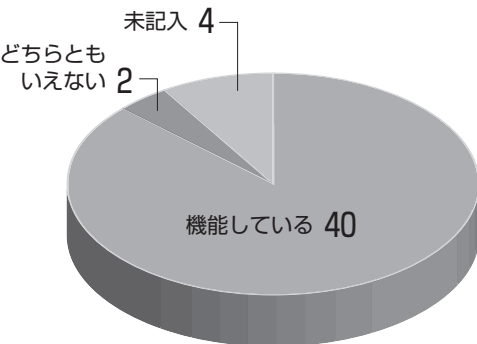
- ・法医学からみた子どもの虐待
- ・講 師：横浜市立大学 法医学教室 井濱容子教授
- ・回 答 者 数：46名
- ・回答者職種：医 師 12名 看護師 20名 SW 12名
心理士 1名 事 務 1名
- ・参加医療機関名：
稲城市立病院、河北総合病院、駒木野病院
公立福生病院、至誠会第二病院、島田療育センター
西多摩療育支援センター、都立小児医療センター
順天堂練馬病院、東海大学八王子病院
杏林大学病院

回答者職種割合（46名）



CPT（院内虐待防止委員会）は機能しているか

（回答者46名）



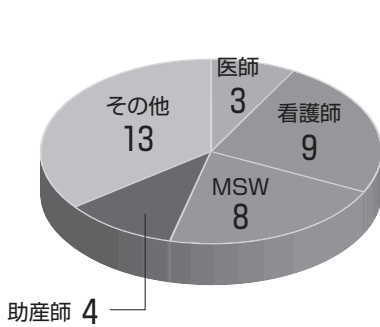
ので、大変参考になったという意見が多かった。児童虐待のサインにどうすれば気づくことができるかという視点の大切さを改めて感じ、今後、より積極的な児童虐待防止への取り組みが必要であるということ共有できた。

今回の活動を通じて、多摩地区の小児科を有する医療機関との連携を図ることができたので、地域の中で活動するための礎を築くことができたと考える。今後も継続してネットワークが機能するような仕組みづくりを検討し、児童虐待防止に力を入れていきたい。

平成31年 3 月29日 講演会開催報告

- ・虐待防止委員会活動報告 ～地域連携の視点から～
- ・講 師：子ども虐待防止センター 佐伯裕子先生
- ・回 答 者 数：37名
- ・回答者職種：医 師 3名 看護師 9名 助産師 4名
MSW 8名 その他 13名
- ・参加医療機関名：
杏林大学病院
都立小児医療センター

回答者職種割合（37名）



地域における
研究活動 ③

東日本大震災による避難者に対する 運動実施状況について

■実施日：平成30年11月24日（土）、25日（日）、
平成31年1月26日（土）、27日（日）、
2月16日（土）、17日（日）
■担当者：石井 博之 保健学部 理学療法学科 教授
太田ひろみ 保健学部 看護学科 教授
相原 圭太 保健学部 理学療法学科 助教
楠田 美奈 保健学部 看護学科 助教
戸井田千鶴 保健学部 看護学科 助教

背 景

平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、多くの住居や生活環境が大津波によって破壊された。復興庁によると、平成30年3月の時点で岩手・宮城・福島の3県で仮設住宅などでの避難生活を余儀なくされている者は約71,000人いるとされている。また、避難生活が長期化し、生活習慣病が増加していることも報告されている。

その生活習慣病に関しては、運動が改善に有効であるとの報告がある。しかし、被災者の運動量は被災前と比べると現在の方が減っていると考えられる。被災者の多くは沿岸部に暮らし、漁業や農業従事者が多いことに加え、多くの仮設住宅は4畳半2間と狭いからである。また、介護予防や転倒防止教室など、運動のきっかけになるサービスが仮設住宅では十分に提供されていないことも、理由の1つになっている。

そこで、被災者が将来、運動不足、生活不活発によるメタボリックシンドロームやロコモティブ、さらには要介護者となるような二次障害予防のための有効な支援を検討し、震災直後から実施している我々の支援活動において、今後の必要な支援を検討するために調査を行うことにした。



仮設住宅集会所での調査の様子（アンケート聴取）

研究目的

本研究の目的は、東日本大震災直後から復興支援に携わる中で、被災者の長期避難生活と生活環境の変化に伴う健康状態を把握することにある。平成28年度の仮設住宅居住時と、平成30年度の復興公営住宅や一戸建住宅居住時での運動実施状況を比較することで、今後の支援の方向性を検討することとする。

研究内容

本研究の特色や独創的な観点として、次のことが挙げられる。

- ・長期間に及ぶ避難生活により、健康に関する諸問題が顕在化しつつある被災者の健康問題に対し、個人因子や環境因子など多方面から問題を検討すること。
- ・多くの復興支援活動がその継続性に問題を抱えるにあたり、本研究により新しい支援の方向性を模索し、より効果的な支援の道筋を検討すること。
- ・東日本大震災の被災地域と他の地域の同年齢層を比較検討することにより、その違いを検討すること。

平成28年度の仮設住宅居住時の運動実施状況を調査により把握していたので、それと比較するために平成30年度の復興公営住宅や一戸建住宅居住時の運動実施状況について調査した。調査の日程は以下のとおりである。

平成30年11月24日（土） 福島県宮北原団地集会所
11月25日（日） 福島県南相馬市小池原畑第二仮設住宅
平成31年1月26日（土） 岩手県宮屋敷前アパート集会所
1月27日（日） 岩手県大槌町 和野っこハウス

2月16日（土） 福島県旧平石小仮設住宅
2月17日（日） 福島県石倉団地集会所
調査は面接直接質問形式によるアンケート調査であり、アンケート項目は居住形態などの生活環境、運動の有無・内容・頻度・時間、家族形態、運動時などの人間関係等である。

対象者は、NPO団体「難民を助ける会」の活動の参加者で、被災前の主な住所は岩手県大槌町・小槌町、福島県浪江町・双葉町・南相馬市などであった。対象者の数と年齢は、平成28年度調査時79名で75.7±6.9歳、平成30年度調査時57名で71.9±11.8歳であった。

統計処理においては、検出力分析には「G power ver.3.1」を、カイ2乗検定には「IBM SPSS ver.25」を使用し、有意水準を5%とした。

研究結果

調査の結果、平成28年度に比べて平成30年度の方が有意に

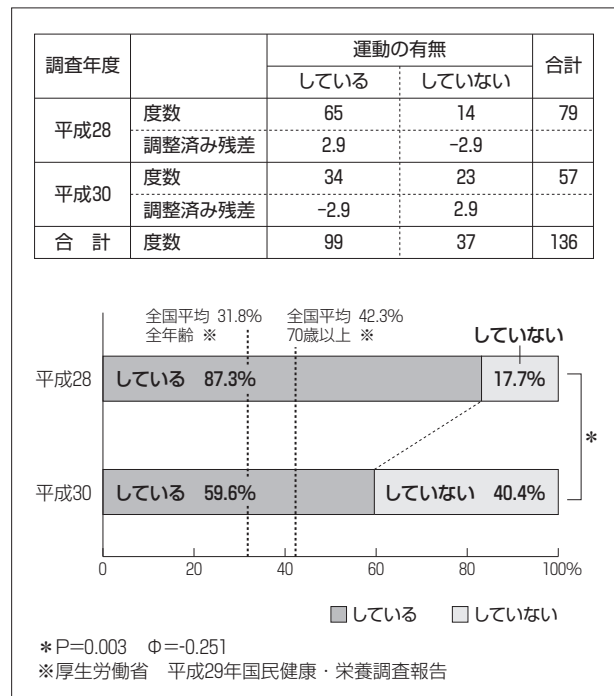


図1 運動実施状況の変化



復興公営住宅集会所での調査の様子（アンケート聴取）

運動している者の割合が有意に減っており、連関についても弱い連関関係にあった。その原因としては、仮設住宅では運動に関わるイベントが盛んに行われていたこと、一緒に運動する仲間がいたことが考えられる。しかし、「厚生労働省平成29年国民健康・栄養調査報告」における全国平均に比べると運動実施率は高いという結果になった。

また、生活環境の変化に伴い、運動実施状況においても変化が認められた。さらに、生活環境の変化に伴い、人々の結び付きの希薄化が生じていることも読み取れた。

しかし、住居移動してまだ時間が経っていないことから、今後の経時的変化を追っていく必要がある。また、ソーシャルサポートなど社会的要因の関連性を明確にするためには、さらに調査数を増やす必要がある。

加えて今後は、現在の環境に応じた人と人との関係作りや、新しい生活の中での生活の質の改善など、我々の可能な支援を構築していきたいと考えている。

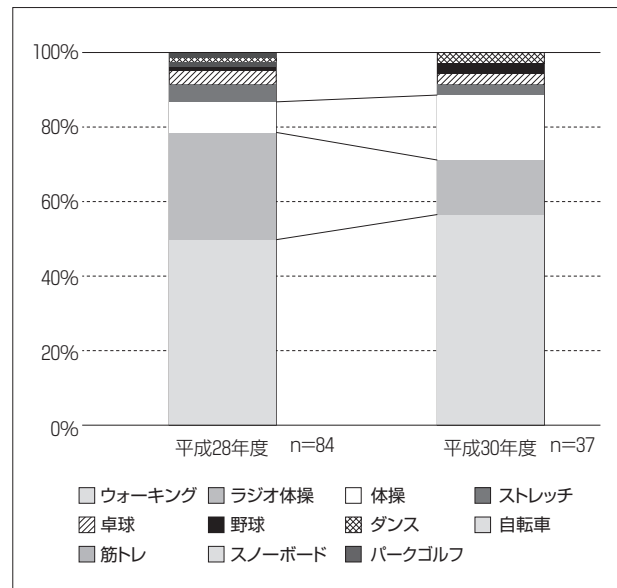


図2 運動種目割合の変化

- 引用文献
- 1) 復興庁：全国の避難者などの数、復興に向けた取組に関する報告書（3月30日）：2-4, 2018.
 - 2) 永富良一：被災地健康運動支援情報ネットワーク（UNDA）の活動, 体力科学, 61：12-13, 2012.
 - 3) 江崎治, 三浦進司：生活習慣病予防の機序 運動の抗肥満効果, 臨床スポーツ医学, 25：1155-1161, 2008.



仮設住宅の集会所

地域における 社会貢献活動 ①

精神に障害がある人の 配偶者・パートナーへの支援

- 実施日：平成30年 5月26日（土）、7月16日（月）、
9月16日（日）、9月23日（日）、
11月3日（土）、11月25日（日）、
12月1日（土）、12月16日（日）
平成31年 1月12日（土）、2月10日（日）、
3月21日（木）
- 担当者：前田 直 保健学部 作業療法学科 助教
谷口 恵子 東京福祉大学 講師
酒井 佳永 跡見学園女子大学 准教授
蔭山 正子 大阪大学 准教授
横山 恵子 埼玉県立大学 教授

目 的

この活動の目的は、精神に障害がある人の配偶者・パートナーを対象としたピアミーティングをするとともに、障害当事者および子どもたちに対してもピアミーティングの場を設定し、家族構成員全員の健康寿命延伸を図ることである。

実施内容

3つの「集い」での話し合い

配偶者・パートナーを対象とした「精神に障害がある人の配偶者・パートナーの集い」、障害当事者を対象とした「結婚・育児について語る当事者の集い」、小学校高学年～高校生の子どもたちを対象とした「精神に障害がある人の子どもたちの集い」を実施した。参加者は配偶者・パートナーが延べ112名、当事者が同17名、子どもが同13名だった。

配偶者・パートナーの集いでは、10～20名程度のグループを作り、ピアミーティングを実施し、それぞれの日常生活における困り事や問題の解決方法について話し合った。小学校高学年～高校生くらいの子どもの子どもたちには、精神障害の親を持つ成人した子どもの立場の人たちから話を聞いてもらった。当事者は、専門家がファシリテーターとなり、グループを作っていた。



リカバリー全国フォーラム2018での講演



リカバリー全国フォーラム2018での講演



ピアミーティング

精神保健福祉や介護者支援に関するイベントへの出演

精神障害者の家族支援に関して一般市民に対する啓発を行う目的で、以下のイベントに参加した。

- ①リカバリー全国フォーラム2018（9月16日、池袋）
- ②家族まるごと支援と家族のリカバリーin札幌（11月3日、札幌）
- ③家族まるごと支援と家族のリカバリーin盛岡（12月1日、盛岡）
- ④ケアラー支援フォーラム2018（12月16日、中野）
- ⑤家族まるごと支援と家族のリカバリーin名古屋（平成31年2月10日、名古屋）

イベントにはそれぞれ50名～100名程度の一般市民、医療・福祉関係者、マスメディア等の参加があり、精神障害者とその家族が抱える問題と支援の必要性について議論を深めた。なお、支援の取り組みについては、読売新聞平成31年3月18日朝刊で「〔安心の設計〕精神障害抱える親…悩み聞き取り子にも目配り看護師や保育士ら チームで」というタイトルの記事で紹介された。

実施効果

集いを実施した効果については、参加者から以下のような意見や感想が得られた。

- ・いちばん辛い時にすがる気持ちで会に参加しましたが、おかげで精神的にすいぶん安定し、私が安定することで夫も安定し、比較的良好な状態を維持することができています。
- ・同じような大変さを抱えている人たちのお顔を見られ、お話も聞くことができたので、大いに共感し、励まされる気持ちになりました。すいぶん気持ちが軽くなったと思います。
- ・配偶者と親族との関わり、子どもとの関わりについて、いろいろなお話をうかがうことができて、私にとっては配偶者の大変さを共有するととても良い機会になりました。
- ・制度面や本人との関わり方等について、多くのことを新たに知ることができましたし、これからは自分でももう少し勉強して、本人と関わっていこうと思うようになりました。

地域における 社会貢献活動 ②

「学生が考えた駅からハイキング」 プログラムの企画・運営

- 実施日：平成30年 5月1日（火）～10月30日（火）
■担当者：志村 良浩 外国語学部 観光交流文化学科 教授

目 的

この活動は、JR東日本八王子支社、みたか都市観光協会と志村良浩ゼミナールが協働し、三鷹市をテーマとした「駅からハイキング」のコースプログラムを企画・運営するというものである。その目的は、三鷹市の観光面での振興に寄与するとともに、学生に学外での学びの場を提供することにより、コミュニケーション能力や事業運営能力を高めることにある。

実施内容

「みたか太陽系ウォーク・スタンプラリー2018」との連携

今回は志村ゼミナールが過去2年間に作成・運営を行ったJR三鷹駅発着の「学生が考えた駅からハイキング」の経験をもとに、10周年を迎える「みたか太陽系ウォーク・スタンプラリー2018」（主催：みたか太陽系ウォーク実行委員会、三鷹市、自然科学研究機構国立天文台、NPO法人三鷹ネットワーク大学推進機構）と連携する形でプログラムを設定した。そのため、ハイキング実施期間は太陽系ウォークイベント期間（平成30年9月21日～10月28日）内で設定し、またコースもウォーキングイベントの象徴的施設である国立天文台を組み込んだものに設定した。

具体的な活動・時期

今年度のプログラムについては、JR三鷹駅関係者との打ち合わせを重ねつつ、ゼミナール生による観光スポットのリサーチ、コース候補の実地調査、コース上の安全性の確認などもきめ細かく実施した。具体的な活動・時期は以下のとおりである。

- ①三鷹市内の観光資源の発掘・実地調査（5月～6月）



JR三鷹駅前でのハイキング受付ブース

- ②ハイキングコースの設定（6月）
 - ③立ち寄りポイントとして想定している各種事業者との折衝・調整（7月～9月）
 - ④パンフレット・マップの掲載内容の企画・校正（8月～9月）
 - ⑤学生によるおもてなしアイテムの作製、受付用案内表示・装飾等の準備（9月～10月）
 - ⑥受付・誘導・同行ガイドなど、プログラム当日の運営（10月）
- なお、「駅からハイキング」の実施期間は平成30年10月8日（月・祝）～10月14日（日）で、志村良浩ゼミナールからは3年生が11名、4年生が4名、計15名が活動に参加した。

実施効果

今回の実施期間は天候不順が続いたために、7日間での一般参加者の数は当初目標の1,500名には届かなかった。しかし、志村ゼミナールが昨年11月に実施したJR三鷹駅発の「学生が考えた駅からハイキング」の実績1,362名を上回り、合計1,366名の参加者を数えた。参加者の大半は普段は三鷹駅を利用しない方たちなので、三鷹市を縦断する今回のコースは三鷹市の魅力を体感してもらう良い機会となった。

「駅からハイキング」の一般参加者に対しては、「みたか太陽系ウォーク・スタンプラリー」の案内（受付でのスタンプラリー冊子の配布、スタンプラリーに関する口頭説明、駅構内アナウンスによるスタンプラリーの告知など）や参加誘導などを積極的に行った。それにより、三鷹市以外からの参加者へのスタンプラリーの認知度の向上、参加者増にも一定程度寄与することができた。そのことが評価され、ウォークラリー事務局の三鷹ネットワーク大学推進機構からは次年度も連携の要請を受けている。

また、参加ゼミナール生は当該プログラムの準備から運営に至るまでの6か月間にわたるプロジェクトを完遂できたことにより、大きな充足感を味わい、同時に多くの学びを得ることもできたので、教育的効果は非常に大きかった。その意味では、地域振興への貢献も含めて、当初の活動目的は達成することができた。



学生による一般参加者への同行ガイド

地域における社会貢献活動 ③

災害に備えるまちづくり

■実施日：平成30年 6月15日（金）、6月29日（金）、7月10日（火）、10月14日（日）、10月28日（日）、11月25日（日）
平成31年 2月1日（金）
■担当者：千田 晋治 保健学部 救急救命学科 特任教授
阪本奈美子 保健学部 救急救命学科 教授
阿部 和巳 保健学部 救急救命学科 特任准教授
石川 高德 保健学部 救急救命学科 特任講師
小菅 真昭 保健学部 救急救命学科 特任講師
下田 勲 保健学部 救急救命学科 特任講師
村山 文隆 保健学部 救急救命学科 特任講師
神山麻由子 保健学部 救急救命学科 助教
久保佑美子 保健学部 救急救命学科 助教
上崎 梢子 保健学部 救急救命学科 助教

目 的

救急救命学科では、学科生徒全員に「応急手当普及員」の資格を取得させ、地域の中学校や住民への指導が行えるように学内教育を推進している。その成果を活かすと同時に、指導技能の向上を図り、さらに本学の社会貢献活動に対する地域住民の理解を促進することが目的である。

実施内容

羽村市立中学校 3校でのBLS指導

- ①平成30年 6月15日（金）羽村市立第 1 中学校 2 年生178名に対し、学生19名と教員 4 名が実施。
②平成30年 6月15日（金）羽村市立第 2 中学校 2 年生165名に対し、学生18名と教員 4 名が実施。
③平成30年 6月15日（金）羽村市立第 3 中学校 2 年生99名に対し、学生11名と教員 3 名が実施。



羽村市との協定に基づくBLS指導



三鷹市総合防災訓練



三鷹市民駅伝大会

三鷹市立中学校 3校でのBLS指導

- ①平成30年 6月29日（金）、三鷹市立第五中学校 1 年生110名に対し、三鷹消防署と合同で学生12名と教員 1 名が実施。
②平成30年 7月10日（火）、三鷹市立第四中学校 1 年生114名に対し、三鷹消防署と合同で学生 8 名と教員 1 名が実施。
③平成31年 2月1日（金）、三鷹市立第三中学校 1 年生136名に対し、三鷹消防署と合同で学生12名と教員 1 名が実施。

三鷹市主催の防災訓練への参加

- ①平成30年10月14日（日）、三鷹市立第六小学校で実施された「三鷹市下連雀地区防災訓練」において、学生 8 名と教員 1 名が防災訓練参加者450名に対しBLS指導を実施。
②平成30年10月28日（日）、三鷹市立第六中学校で実施された「三鷹市総合防災訓練」において、学生16名と教員 3 名が防災訓練参加者1200名に対しBLS指導を実施。

駅伝大会における救護活動

平成30年11月25日（日）、第27回三鷹市民駅伝大会の開催に伴い、本部ならびに中継所の救護担当として、学生10名と教員 5 名が参加し、応急救護を担当した。駅伝は人気のあるスポーツだが、激しい運動競技なので身体的負荷が大きく、ランナーがケガをしたり、時には心肺停止に陥ったりすることもある。そこで、救急救命学科では駅伝大会参加者の安心と安全の確保を図る目的で、三鷹市の依頼に基づき救護所における応急救護を担当した。

なお本大会と併せて 4 ～ 5 歳児（約100名）を対象にした「走りっこ教室」が開催されたが、その会場での応急救護も担当した。

実施効果

「災害に備えるまちづくり」を目的とした「救急救命活動」では、学生が中学生へのBLS指導やマラソン大会の救護所

担当を担い、若い人からご高齢の方まで様々な年代の方と触れあうことでコミュニケーション力を磨くことにつながった。また、三鷹市の総合防災訓練ではBLS指導を通して自助、共助という観点から減災の意識を継続して持ち続けることの重

要性について多くの市民に訴えることができた。

これらの活動は、学生自身の防災に対する意識と技術の向上とともに、市民の地域防災力を高める一助となったことは地域に密着した社会貢献活動の成果である。

地域における社会貢献活動 ④

HIV感染予防に関する情報の提供

■実施日：平成30年 5月13日（日）、6月3日（日）
■担当者：北島 勉 総合政策学部 総合政策学科 教授

目 的

HIV（ヒト免疫不全ウイルス）の感染予防とHIV/AIDS（後天性免疫不全症）やセクシャリティーに関する理解を促進することが、この活動の目的である。

実施内容

平成30年 5月13日（日）に、JR八王子駅前のユーロードで開催された第13回学生天国（八王子市の合同学園祭）において、HIV感染予防に関する情報提供を行った。
具体的には、学生天国の会場に「エイズ・ピア・エデュケーション」を行うためのブースを設け、そこに来てくれた人たちに対して、八王子市保健所の保健師の皆さんと一緒に、さまざまな手段を用いて情報を提供した。たとえば、HIV/AIDSに関するクイズ、恋愛シミュレーション（HIV感染予防に関するパソコンを使ったゲーム教材）、ポスターによるHIVに関する基本情報の提供、コンドームの配布などである。
また、6月3日の午後に渋谷駅ハチ公前付近で開催された『HIV検査普及週間』街頭キャンペーン（エイズ予防財団主催）に参加し、他大学、企業やNGOからのボランティア総勢55

人で、HIV/AIDSのパンフレット、コンドーム、HIV検査マップなどが入った予防啓発グッズの配布活動を行った。

実施効果

学生天国では、HIV/AIDSに関するクイズに回答してくれた人の数が約100名にのぼった。これは約100名に確実に情報が届けられたということである。また、街頭キャンペーンでは、予防啓発グッズ3000部を配布することができた。
この活動は、とにかく地道に継続していくことが大切であり、今回の活動の成果は次回へとつながるものとなった。



参加者全員で



街頭キャンペーンに参加した学生



ブースの前で



「恋愛シミュレーション」実施中

地域における 社会貢献活動 ⑤

大学・地域関係機関による地域共生システムの構築 ～子供の居場所作りから学習支援プログラムへ～

■実施日：平成30年5月から平成31年3月までの
各月第1水曜日（計10回）
■担当者：富田 泰彦 医学部 医学科 准教授
八木橋宏男 外国語学部 英語学科 准教授
江頭 説子 医学部 医学科 特任講師
加藤 雅江 医学部付属病院 患者支援センター 課長

目 的

三鷹市中原地域で「居場所づくりプロジェクト『だんだん・ばぁ』」を運営している。目的は、大学・地域関係機関が連携する新しい「地域共生システムの構築」にある。

昨年度の活動内容は、平成29年5月から平成30年3月まで、22回の子ども食堂の開催、2回の地域住民への活動報告及び交流を目的とした集会であった。参加者は毎回70名を超え、参加者の合計人数は200人弱であった。この活動を通じて考えたのは、大人が楽しそうに生きている姿を子どもに見せ、「大人になるのも悪くない」と思わせる関係を持つことである。また、この居場所は子どものみならず、必要とする人が誰でも利用できるようにしたい。

これにより、子どもたちには「行動することが生きていくことにつながる」と実感してもらい、貧困問題の解消に向けた活動をしたいと考えている。最終的には「大学と地域」「家庭と地域」「子どもたちと地域」それぞれをつなぐ役割を果たしたい。これが「地域共生システムの構築」である。

実施内容

平成30年度から新たに始めたのが、「学習室だんだん・らぼ」という子どもたちが学習する場を確保する活動である。「学習室だんだん・らぼ」の活動は、三鷹市中原にある多世代コミュニティホーム「ふぁみりあ」の交流室を使って、平成30年5月から平成31年3月までの各月第1水曜日（18時～19時30分）、計10回実施された。

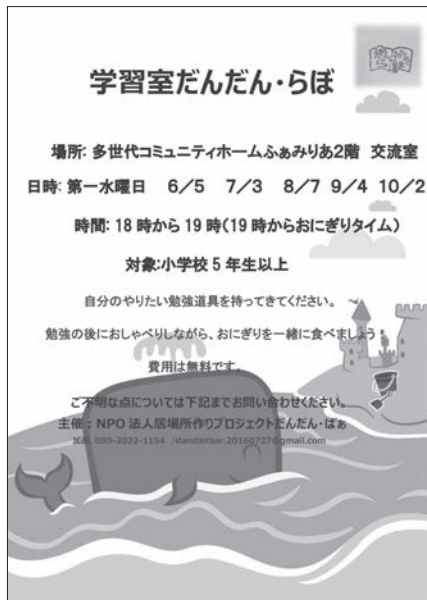
具体的な活動内容を述べる。対象は小学校5年生以上で、18時に学習室を開き、スタッフが個別に学習支援を行う。19時からは軽食（おにぎり）を提供し、みんなで一緒におしゃべりをしながら食べるというものである。

参加者は、子ども（小学校5年生～中学生）がのべ76人、ボランティアスタッフがのべ82人であった。ボランティアスタッフは本学園教職員（教員、医師、看護師、臨床検査技師、ソーシャルワーカー）、三鷹市役所職員（保育士、福祉事務所CW、児童館職員）、特別区職員、高校教師、地域住民などであり、さまざまな背景を持つ多世代にわたる方々にご協力いただいた。

実施効果

活動の場として使っているのが多世代コミュニティホーム「ふぁみりあ」（看護小規模多機能型居宅介護）にある交流室なので、多くの地域住民が参加してくれた。その結果、学習室は子どもたちの学習を地域住民が多世代で支えていく交流の場となった。

子どもたちにとっては、マンツーマンで学習支援してもらえる、安心・安全な学習室で勉強できるので、学習意欲も高まり、同時に多世代との交流により人間的な成長にもつながった。また、学生たちにとっては「地域で生活すること」「地域の人的資源を醸成していくこと」「地域に働く専門職者の視点を会得すること」について、実感を伴った形で理解する良い機会となった。



学習室の案内



軽食のおにぎり



学習教材

地域における 社会貢献活動 ⑥

極低出生体重児の育児支援サークル 「ぴあんず」

■実施日：平成30年5月19日（土）、7月14日（土）、
10月13日（土）、
平成31年2月23日（土）
■担当者：吉野 純 保健学部 看護学科 教授
岩田 洋子 保健学部 看護学科 講師
中村 明子 保健学部 看護学科 学内講師

目 的

極低出生体重児は、NICUを退院しても治療の後遺症や特有の障害を抱えるケースが多く、育てる過程でさまざまな課題に直面することも多い。このように育てにくさ、育ちづらさがあり、親や家族は健康児を育てる以上に育児に困難を抱えている。しかし、育児に関する情報が少なく、近所や知り合いにも同じような経験者がいないために、親はどうしても孤立を深めることになってしまう。そこで重要になるのが、専門家による学習会の開催や同じような状況にある親同士の交流などを通じて、親たちの子育てを支援していくことである。

そのために、「ぴあんず」の活動は次の2つを目的としている。1つめは、極低出生体重児の親たちが、子育ての悩みを共有し、課題の解決に向けて取り組めるようになり、子育てを大変だけど楽しいものとして感じることができるようになることである。そして2つめは、子どもの健全な成長発達につなげることである。

実施内容

「ぴあんず」は今年度も4回開催され、各回にテーマを設定し、家族は学習会やフリートークなどで活発に議論をかわした。

1 回目：平成30年5月19日（土）

親7組9名、子ども7名が参加し、親の会では「フリートーク」が行われた。食事、言葉、身体の動き、生活のリズムに関することなどが参加者より話題として出されたが、内容と



「ぴあんず」参加の子どもたちと学生

しては低出生体重児に特徴的なものだけではなく、一般的な子育ての悩みなども多かった。

2 回目：平成30年7月14日（土）

親13組17名、子ども14名が参加し、親の会では「就園・就学について」をテーマとした本学付属病院の小児科医師による学習会が行われた。保育園や幼稚園では、障がいがあることで入園を断られるケースや特別な配慮を必要とするケースもあるので、子どもに合った場所を選ぶための方法や、就園・就学までに家庭でできる準備について学習した。

3 回目：平成30年10月13日（土）

親4組5名、子ども3名が参加し、親の会では「フリートーク」が行われた。話の中には、療育など行政や民間のサービスを利用するに当たっての相談もあった。

4 回目：平成31年2月23日（土）

親9組12名、子ども9名が参加し、親の会では「日々の生活の中にある大切な感覚経験と動きづくりのチャンス」をテーマとした外部講師（作業療法士）による学習会が行われた。日々の子どもとのかかわりの中に、生活していく中に、子どもの発達を促す要素がたくさんあるので、一工夫すると良いという話があった。また、幼稚園や学校などで子どもと関わる教員や保育士から、「家庭で対応してください」と言われることが多くて困っていると相談した親に対しては、講師から具体的なアドバイスがあった。

実施効果

極低出生体重児の親はともすると孤独になりがちだが、「ぴあんず」に参加することによって、子育ての悩みを共有できて、課題の解決に向けて前向きに取り組もうとする姿勢が見受けられるようになった。また、学生たちにとっては地域でのボランティア活動や育児の楽しさを実感できる貴重な機会となった。

花でとりもつ地域の『輪（和）』

■実施日：平成30年9月23日（日）、12月27日（木）～平成31年1月4日（金）、3月3日（日）
■担当者：楠田 美奈 保健学部 看護学科 助教
木村 尚未 華道家元池坊中央委員 華督

目 的

いけばな作品を展示してたくさんの人たちに見ていただき、あるいは一緒に作品を作ることを通じて、老若男女を問わず多くの人たちとの交流を図り、共に笑顔になってもらうことが、この活動の目的である。

実施内容

高齢者といけばなを楽しむ

平成30年9月23日（日）、高齢者施設で華道会を開催した。この活動は2年前から継続しているもので、華道部員4名が参加し、10名の高齢者と秋らしい花をめでながら、コミュニケーションも図りつつ一人ひとりが1つの作品を制作した。

正月の花の展示

平成30年12月27日（木）から平成31年1月4日（金）まで、アトレヴィ三鷹内で華道部員10名が正月の花の展示を行った。今回は、アトレヴィ三鷹からの要望もあり、改札内店舗すべてに作品を展示することになり、過去最大の作品数を制作・展示・管理することになった。また、今回の作品制作においては竹を使うことを目玉にしたいということで、理事長、副理事長の承諾を得た上で八王子キャンパスに自生している竹を採取し、使わせてもらった。27日に「公開パフォーマンス」として、展示スペースでの作品制作を見てもらい、28日から展示が始まった。

子どもいけばな体験会

平成31年3月3日（日）、井の頭キャンパスで開催された「ツインズマーケット」に華道部員1名がサポーター役として参加し、子どもたちに花桃を花材としていけばなを体験してもらった。子どもたちの関心が高く、用意した10名分の花材は1時間足らずで使い切ってしまうほどの盛況だった。

実施効果

高齢者とのいけばなの制作を通して、学生たちは高齢者と同じ花をさまざまな角度から眺めながら「一番美しく見えるのはどこだろうか」と共に考えることで、『相手と同じ目線

で対象を見る』ことができるようになった。

正月のいけばなの展示を通しては、作品を『誰か』に見てもらふことや誰かのために生けることの楽しさを体感でき、多数の部員で作品を管理する『調整能力』や『協力し合う』ことも経験できた。

さらに、子どもいけばな体験会を通しては、生き物である植物を大切にすることで、子どもたちが自分に身近な存在である家族や友人を大切に作る気持ちを育むことに寄与することができた。

すべての活動を通じて、学生たちは『誰かの気持ちに寄り添える心』や『思いを伝える力』を育むことができた。



高齢者といけばなを楽しむ



アトレヴィ三鷹の展示－作品制作風景



ツインズマーケットいけばな体験

鎌倉浄智寺写真供養感謝祭の企画・運営

■実施日：平成30年11月10日（土）
■担当者：宇佐美貴浩 外国語学部 観光交流文化学科 教授

目 的

写真供養感謝祭とは、一人ひとりの人生を語る思い出深い写真に感謝の気持ちを込めて供養することによって、新しい人生へと歩み出す手助けをする取り組みである。鎌倉瑞泉寺で17年間続いてきたこの感謝祭は、平成26年より北鎌倉浄智寺に場所を移し、新たに開催されることになった。毎年11月第2土曜日に開催されているが、将来的には鎌倉の観光イベントとして定着させ、地域活性化を促進することを目的としている。

実施内容

鎌倉浄智寺写真供養感謝祭において、宇佐美ゼミナールは現地自治体との調整、ポスターやSNS、および杏園祭における写真関連企画の実施による広報活動、当日の参加者への対応など、写真供養感謝祭の企画・運営全般を担った。

具体的には、開催場所である鎌倉浄智寺とのスケジュール調整や必需品の手配などを行い、広報活動としてはポスターの作製および鎌倉近隣地区への配布や地域事業者へのPRの協力依頼を実施した。また、SNSなどの媒体により、動画や写真を使用してそれらの活動の宣伝を行い、学園祭における写真関連イベントを開催するなど、広報宣伝活動を行った。

写真供養感謝祭当日には、参加者の受付や案内のほかに、高齢者の参加者が多いことから安全を第一に考えた危機管理的な対応やサポートも実施し、円滑なイベント運営に寄与した。なお、当日の参加者は147名であった。

実施効果

「地域活性化」「地域課題解決」への寄与

参加者に対して鎌倉の観光ツールの1つである浄智寺の境内を案内することにより、鎌倉観光のPRに貢献すると同時に、写真供養感謝祭が地域活性化を促す取り組みであることを理解いただいた。さらに、本学の学生が写真供養感謝祭を運営することにより、観光交流文化学科の存在を知らしめ、地域活性化に関する活動に貢献していることもPRできた。

参加学生の教育効果

一連の活動を通して、学生は地域振興に関するプロジェクトを成功させるための知識と技術を身につけることができ

た。また、地域活性化には地域の人と文化と産業が密接につながり、協力し合うことが必要であることを学ぶこともできた。さらに、キャンパスとは違う現場での学びや地域自治体・企業、および地域の人々との交流は、参加した学生にとって貴重な体験となった。

アンケートの分析結果

年代別参加者については、60代以上の割合がここ4年間で8割から7割へと減少し、高齢者中心から若干ではあるが少し若い世代に参加者が推移してきたことが判明した。

参加者居住地については、鎌倉市内が約3割を占め、鎌倉市外で神奈川県内が約5割を占めることから、やはり当該イベント開催地である鎌倉周辺の参加者が大多数を占めることが判明した。

また、写真供養の目的としては、遺品整理や気持ちの整理のためとした方が4年前の8割から2割以上減少し、目的が多様化の傾向を示していることが判明した。

最後に参加者がどのように当該イベントを知ったかについては、ポスター・チラシによる情報入手の割合が、昨年度に比べて約1割増加し、ホームページと合わせると約5割に上ることから、新規参加者を増やしていくには、ポスター・チラシの配布や、ホームページなどによる告知の充実などの地道な活動を継続していくことが重要であると考えられる。



鎌倉浄智寺写真供養感謝祭の参加者



「鎌倉浄智寺写真供養感謝祭」会場の受付

医療系大学生による保育園での いのちのおはなし会の実践

■実施日：平成30年 8月27日（月）、8月30日（木）、
8月31日（金）
平成31年 2月22日（金）2回、2月25日（月）、
2月26日（火）、2月27日（水）、
2月28日（木）2回
■担当者：佐々木裕子 保健学部 看護学科 准教授
鈴木 朋子 保健学部 看護学科 学内講師

目 的

近年、幼い子どもたちが被害者となる性犯罪や命を軽視した事件が後を絶たない。子どもたちの健やかな成長と発育を支えるためには、周囲の大人たちが子どもの安全を確保し、身を守る知識とスキルを提供する必要がある。しかし、教育の現場である保育園や家庭においては、その両方が十分とは言えない状況である。そこで、15年ほど前から幼児とその保護者を対象に実施し続けているのが「いのちのおはなし会」である。その目的は、子どもたちがいのちはかけがえない大切なものであることを知ることと、自分の体を知り、自分で自分を守ることができるようになることの2点である。

実施内容

三鷹市近郊の保育園において4、5歳児とその保護者を対象に「いのちのおはなし会」を10回実施した。実施者は8名の保健学部学生（看護学科、健康福祉学科、臨床心理学科）で、参加者は園児4歳児が195名、5歳児が44名、保護者が35名、保育士が36名であった。

具体的な活動内容としては、まずいのちの始まり、出産、男女の体の違い、プライベートゾーンの大切さなどを、パネルシアターやエブロンシアターによる約25分間の寸劇で伝えると共に、おはなし会終了後には、胎児人形の抱っこ体験もしてもらった。その後、参加した保護者と保育士、それに学生も交えて意見交換を行い、おはなし会の振り返りを行った。

実施効果

例年と変わらず、子どもたちは集中しておはなし会に参加してくれた。「人に見せてはいけない自分だけの大切な場所は何か」と問うと、「プライベートゾーン」と大きな声で答えてくれた。

保護者からは、「学生からのメッセージは子どもたちに届きやすく、子どもたちの自己肯定感が高まる」「体や性の疑問に答えるヒントをもらった」などの肯定的な意見が多数聞かれた。また、保育士からは「おはなし会は子どもからの体

や性に関する質問に向き合う機会になっている」「命の大切さとプライベートゾーンは、その後の保育の中で子どもたちに繰り返し伝えることが可能なキーワードとなっている」などの意見が聞かれ、保育現場からのおはなし会に対するニーズが高いことが確認された。

一方、多様な性のあり方が問われる中、男女という2つの性で話を終わらせてよいのかななどの意見があり、おはなし会の内容の検討が課題となった。



パネルシアター：いのちの始まりの大きさ



パネルシアター：頑張って赤ちゃんを産むお母さん



パネルシアター：男の子のからだと女の子のからだ

少年期スポーツ外傷・障害の予防啓発活動

■実施日：平成31年 2月9日（土）
■担当者：門馬 博 保健学部 理学療法学科 講師

目 的

少年期の成長過程においては、身体の成長も影響してスポーツ外傷・障害を発症する危険性が高い時期であり、この時期に運動器のコンディショニングを行うことはその予防に極めて重要である。そこで、この活動では地域スポーツ少年団に所属する小中学生、およびその保護者を対象としたストレッチングやテーピング、さらには応急処置に関する講習会を開催し、地域におけるスポーツ外傷・障害の予防についての啓発を行っている。

実施内容

今回の活動は、大学近隣を拠点として活動する少年野球チームの1～6年生、計20名を対象としたものであり、活動責任者である門馬、理学療法学科学生ボランティア3名、保護者5名が参加した。

まず始めに、選手個々のフィジカルコンディションのチェックとして、関節可動域、筋力、瞬発力、そして競技特異的指導としてバットスイングのスピード計測を行った。



肘関節の可動域計測



股関節の可動域計測



垂直跳びの計測



ストレッチ指導（全景）



ストレッチを行う上で意識する部位を指導

地域における
社会貢献活動 ⑪

三鷹市における健幸教室および 体力測定の実施

■実施日：平成30年 7月21日（土）、9月22日（土）、
11月17日（土）、
平成31年 2月23日（土）
■担当者：榎本 雪絵 保健学部 理学療法学科 准教授

目 的

慶應義塾大学等と実践したプロジェクト「平成26年度ICT健康モデル（予防）の確立に向けた地方型地域活性化モデル等に関する実証の請負」の参加者によって立ち上げられた自主グループ「体笑会」の主催で、参加申し込みされた三鷹市在住の高齢者を対象に、平成28年から実施しているのが健幸教室である。その目的は、参加者の健康増進、健康寿命の延伸を図ると同時に、参加者間の社会交流を促進することである。

実施内容

- 今年度は4回実施した。その概要は以下のとおりである。
- ①平成30年 7月21日（土）
参加者29名、学生ボランティア28名、近隣クリニックの看護師 1名
 - ②平成30年 9月22日（土）
参加者32名、学生ボランティア16名、近隣クリニックの看護師 1名
 - ③平成30年11月17日（土）
参加者28名、学生ボランティア14名、近隣クリニックの看護師 1名
 - ④平成31年 2月23日（土）
参加者31名、学生ボランティア11名、近隣クリニックの看護師 1名、近隣クリニックの理学療法士 1名
- 実施内容については、開催ごとの体力測定および近隣のク



体力測定

リニックに勤務する看護師による「骨粗鬆症ミニ講座」を今年度より新たに加えた。また、プログラムの内容については、第3回目は「猫背を治そう!」、第4回目は「立位バランスを改善しよう!」とテーマを決めて、それまでのプログラムの内容を一部修正して実施した。

学生は、会場整備や参加者の誘導などの開催準備と、参加者からの生活状況の聴き取りを含む運動指導の実施・補助に加え、握力やバランス能力（ファンクショナルリーチテスト）などの体力測定、血圧や脈拍などのバイタル測定を行った。

実施効果

今年度初の試みとして、新たにテーマを決めプログラムの一部を修正して実施したが、参加者からは好評を得ることができた。

学生の中にはこれから臨床実習に臨むことになる者もいたが、そういう学生にとっては有意義な実践の機会となった。また、今年度より新たに加えた看護師による骨粗鬆症のミニ講座を聴講できたことで、単に知識を得るばかりではなく、公衆衛生の実践を体験することもできた。さらに、第4回目の健幸教室には近隣クリニックの理学療法士もボランティアとして参加してくれたので、学生にとっては実際に勤務している理学療法士から現場での仕事についてのさまざまな情報などを得る絶好の機会となった。



第3回目「猫背を治そう!」での実践



骨粗鬆症ミニ講座

地域における
社会貢献活動 ⑫

健康寿命延伸のための スポーツ機会提供プログラム

■実施日：平成30年 5月20日（日）、6月2日（土）、
8月25日（土）、12月22日（土）
平成31年 2月9日（土）
■担当者：相原 圭太 保健学部 理学療法学科 助教
石井 博之 保健学部 理学療法学科 教授
楠田 美奈 保健学部 看護学科 助教

目 的

この活動は「健康寿命延伸」がメインテーマである。活動の中心になっているのは、中・高齢者が年を経るごとに変わっていくニーズと能力に応じて運動が継続できるような専門情報の提供、ならびに運動の機会を提供する「生涯スポーツの機会提供」プログラムの実施である。その活動を通じて、中・高齢者が自分自身の身体に関心を持ち、日常生活の中に運動を無理なく取り入れ、継続するための支援をすることを目的としている。

実施内容

今年度の活動も第1回目は5月の「はむら健康の日」に実施したが、今回は従来とは志向を変えて行った。昨年度まではロコモティブシンドローム予防のコーナーを設けて、ロコモ度のチェック、運動・健康に関する相談会を実施していた。しかし、今回は骨粗鬆症の予防をテーマに、骨密度の測定やコンディショニング作りのレクチャー、ボールウォーキングの体験会などを実施し、運動の多様性を提案することに重きを置いたのである。



体組成計による測定



体力測定会



ボールウォーキング体験会



コンディショニングのレクチャー

地域における
社会貢献活動 ⑬

多胎育児支援活動 「ツインズマーケット」の開催

■実施日：平成31年3月3日（日）
■担当者：太田ひろみ 保健学部 看護学科 教授
佐々木裕子 保健学部 看護学科 准教授
鈴木 朋子 保健学部 看護学科 学内講師
山内 亮子 保健学部 看護学科 学内講師
場家美沙紀 保健学部 看護学科 学内講師

目 的

「ツインズマーケット」の開催には2つの目的がある。1つは、ふたご・みつごを持つ家族が多胎育児に役立つ情報や知識を得ることである。もう1つは、多胎育児経験者同士で交流を持ち、多胎児特有の不安や問題を解決する機会を得ることである。

実施内容

年に一度、本学井の頭キャンパスで開催される「ツインズマーケット」は、今回が14回目となる。その活動内容は、「子どもがいる家庭の防災対策」、「講演会」、「多胎育児中のご家族の情報交換会、バザー」の3つで構成されている。

防災対策については、女性や子どもの防災に視点をおき、乳幼児がいる家庭に必要な防災グッズや非常食をおいしく食べるための調理方法の展示、災害時の対応行動パンフレットの配布などを行った。



子どもたちの保育



情報交換会



「ツインズマーケット」参加者の皆さん

講演会では、国内最大の多胎児親の会「ツインマザーズクラブ」の会長である杉浦裕子先生に、『ふたご・みつごを育てること』をテーマに講演していただいた。

参加者同士の情報交換会では、父親グループと母親グループがそれぞれに興味があるテーマごとに、「仕事をしながらの子育て」、「ふたごのきょうだいへの対応」、「子どもの年齢別」の小グループに分かれ、普段の育児で困っていること、工夫していることなどについて話し合った。

実施効果

講演を聞いた参加者からは、「小さいことにくよくよしなくてよいのだなと思った」、「双子を育て上げた方のお話、双子本人からの体験談などのお話を聞けて、とても興味深かった」等の感想が寄せられた。また、情報交換会については、「普段の生活の中では双子の親同士が会う機会がないので、こうした機会はとてもありがたかった」と好評をいただいた。

今回の活動において、学生は子どもたちの保育を担当した。おもちゃで遊んだり、お絵かきをしたり、子どもたちの発達に合わせた遊びを工夫しながら保育を行った。両親と離れたがらずに泣き続ける子どもを、どうやって気分を変えて泣き止ませるか、乳児にミルクを与えた後にどのように上手に排気をさせるか、というようなことを子どもと共に時間を過ごす中で試行錯誤することにより、実習に備えた体験をすることができた。

地域における
社会貢献活動 ⑭

アトレヴィ三鷹 4 F イベントスペースでの 健康・運動相談活動

■実施日：平成30年11月6日（火）、11月13日（火）、11月20日（火）
■担当者：石井 博之 保健学部 理学療法学科 教授
太田ひろみ 保健学部 看護学科 教授
朝野 聡 保健学部 健康福祉学科 准教授
楠田 美奈 保健学部 看護学科 助教
相原 圭太 保健学部 理学療法学科 助教

目 的

本学における地域貢献の一環として、これまでアトレヴィ三鷹において写真部や華道部の作品の展示などを実施してきた。それらによる市民との交流の中で、保健学部による健康関連の協力への要望が高まり、アトレスタッフなどとの協議を経て、このプログラムを実施するに至った。

本活動の目的は、

- ・自身の健康や運動に関する相談活動を実施することで、参加者に生活習慣や運動習慣について考える機会を提供すること
- ・体組成計を用いた測定を通して健康と体について関心を持ってもらうためのきっかけ作りをすることである。

実施内容

アトレヴィ三鷹の4階にある広さ30㎡程度のイベントスペースに、体組成計と教員による相談コーナーを設置し、下記の活動を行った。

①体組成計を設置

体組成計を設置し、三鷹駅利用者が自由に立ち寄って計測できるようにした。また、体組成計の近くに適性数値を掲示し、測定値と基準値とを見比べてもらい、自分の健康状態を



会場に設置した体組成計（手前）、相談コーナー（奥）

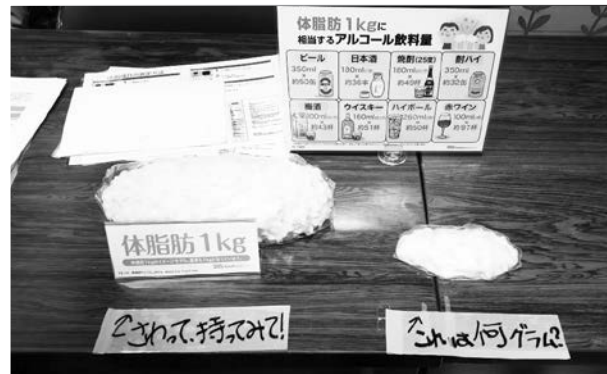
把握してもらった。

②教員による相談コーナーの設置

教員が測定値に関する質問に答えたり、健康に関する相談に応じたりすることができるスペースを設けた。なお、活動時間は17時ごろから1時間半程度とし、5人の教員のうち少なくとも2人はスペースに常駐するようにした。

実施効果

今回はアトレヴィ三鷹において実施する初めての健康相談活動だったので、どのくらいの集客があるのか判断が難しかったため、教員のみで実施した。結果としては、多くの市民が参加してくれたので、健康や運動についての関心の高さを実感することができた。また、利用者のさまざまな反応も見定めることができたので、今後はこの活動を学生教育の機会としてとらえ、継続させていきたいと考えている。



展示物の一例



教員による相談コーナー

地域における
社会貢献活動 ⑮

「アトレヴィ三鷹店インバウンド需要に向けたおもてなし施策」への言語協力

■実施日：平成30年11月1日～平成31年3月31日
■担当者：宮首 弘子（張弘）外国語学部 中国語学科 教授

目 的

今回の活動の目的は、中国語による館内案内・表記がないために、中国人観光客へ各ショップの商品情報が伝わらない、というアトレヴィ三鷹店の課題に対する改善のきっかけを作ることである。それは、本ゼミナールの学生が持っている留学経験と中国語の語学力を活用した社会貢献の実践でもある。

実施内容

2020年東京オリンピックに向けてより多くの中国人観光客を迎え入れたいとするアトレヴィ三鷹店からの要望を受けて、本ゼミナールが企画・実施したのが、おすすめ商品の中国語表記のポスターを作成し、中国人観光客にアピールすることだった。

具体的には、中国の旧正月「春節」（平成31年2月5日）に合わせて、「アトレヴィ三鷹店おすすめ商品」の中国語と日本語の二言語ポスターを作成した。本ゼミ生が2つのグループに分かれて、それぞれが創意工夫を凝らし、異なるデザインの2枚の中国風ポスターを手作りした。おすすめ商品

のセレクトから紹介文の作成（日本語と中国語）、ポスターのデザインまで全ての工程をゼミ生だけで行った。しかも、ポスターには細部にわたって凝った装飾が施されているので、見るだけでも楽しいものとなった。

なお、それらのポスターは平成31年1月15日（火）から2月20日（水）まで、駅ナカ3階中央エスカレーター横、駅ナカ4階休憩スペースに掲示され、アトレヴィ三鷹店のHPにも掲載された。

実施効果

今回の活動には、学生15名（留学生4名、日本人学生11名）が参加したが、彼らからは次のような感想が得られた。

- ・自分たちの留学経験を地域のために役立てることができた。
- ・企業と綿密な打ち合わせをすることによって、企業との関わり方を学んだ。
- ・よりクオリティーの高いポスターを求めて試行錯誤を繰り返したことで、自ら考え、とことん追求することの大切さと難しさを体得できた。

今回の活動を通して、大学で身につけた知識と技能によって地域社会に貢献することは学びの可視化になり、さらなる学習意欲の向上につながるものだと感じた。また、日本人学生と中国人留学生と一緒に活動したことは、協働の良い経験となり、今後の成長にもつながるものと考えている。



日本と中国の建造物と文化物をモチーフにポスターを作成



中国の伝統的な門「牌楼（パイロウ）」を使い中華街を表現

地域における
社会貢献活動 ⑯

みたか知り隊ウォーク

■実施日：平成31年3月23日（土）
■担当者：井上 晶子 地域交流推進室 特任講師
深沢 貴沙 地域交流課
徳田 護 地域交流課
平 みすき 地域交流課

目 的

「みたか知り隊ウォーク」は、「高齢化社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム」（以下BP：《Brush up Program for professional》）の受講生が中心となって、学部生、企業、地域交流課が連携して企画したまち歩きイベントである。三鷹市内の地域資源を「三鷹で学ぶ受講生・学生」の視点から調査、検証し、地域の魅力を楽しみ体験できるスポットを決定した。一般公募により参加者を募り、学生ガイドによりそのスポットを巡るというものである。その大きな目的の1つは、三鷹の魅力を広く発信し、三鷹の認知度を高め、地域の活性化につなげる端緒とすることである。

実施内容

始めに、平成30年7月から平成31年3月にかけて、BP受講生有志、学部生、地域交流課、農業経営者、企業によるワークショップを中心に、本年度のテーマ探し、テーマに沿った



専門知識を生かしたBP受講生の説明



農家の説明



緑化センターでの寄せ植え体験



参加者に学部生から完歩賞授与

事業の組み立てを行った。この作業の中で、コースを組み立て、事業実施に向けての役割分担、他施設・機関への事業説明と協力依頼、実地検証、一般大衆へのPR活動を経て実施に至った。

その実施内容は、三鷹市農家、JA緑化センター、国立天文台の協力のもと、三鷹市の農業エリア・大沢地区をウォーキングするというものである。その中で、水車農家ではボランティアによる説明が、JA緑化センターでは職員の指導による寄せ植え体験があり、さらにBP受講生によるガイド、学部生による完歩賞の授与も行われた。

なお、参加者は一般参加者が16名、学部生が5名、BP受講生が12名、地域交流課の職員が3名、計36名だった。

実施効果

一般参加者に対するアンケートによると、全員が満足と評価していた。中には「自分が住んでいる地域の人たちとの交流ができて嬉しい」という意見もあった。また、BP受講生がそれぞれの得意とする面や各自の人脈を生かして事業を組み立てたので、内容が農業（産業）、文化、歴史、福祉と多岐にわたり、実施者と参加者双方への教育効果も得ることができた。さらに、住民が自分が暮らす地域のことを知り、地域の人たちとの交流がなされたことにより、地域への愛着が増すとともに地域の活性化にもつながったと思われる。

■実施日：平成30年12月10日から平成31年3月31日までの
第2、第4水曜日、平成30年12月21日（金）、
平成31年3月23日（土）
■担当者：江頭 説子 医学部 医学科 特任講師
八木橋宏勇 外国語学部 英語学科 准教授
富田 泰彦 医学部 医学科 准教授
加藤 雅江 医学部付属病院 患者支援センター課長

目 的

本活動では、平成28年8月より毎月第2・第4水曜日に、「地域の中に居場所を作り、夕ご飯と一緒に食べ、学習支援も広く行う」居場所づくりプロジェクト「だんだん・ばあ」を開催している。本活動により、子どもたちには「行動することが生きていくことにつながる」と実感してもらい、食事の問題にとどまらず精神的な充足という根本的な面も含め、貧困問題の解消を目指している。最終的には、「大学と地域」、「家庭と地域」、「子どもたちと地域」、それぞれをつなぐ役割を果たし、地域共生の新しいモデルとなることを目指している。

実施内容

子ども食堂の開催（計7回）

平成30年12月12日
平成31年1月9日、1月23日、2月13日、2月27日、3月13日、
3月27日
毎回の参加者は50名を超え、7回の延べ参加人数は、子ども276名、親23名、ボランティアスタッフ130名、計429名であった。ちなみに、ボランティアスタッフは、本学関係者（医

師、看護師、作業療法士、ソーシャルワーカー、教員、学生）、三鷹市役所職員、高齢者施設職員、他大学教員、他大学学生、地域住民によって構成されていた。

地域住民への活動報告および交流を目的とした集会

・実施日：平成30年12月21日（金）
参加者は地域住民6名、ボランティアスタッフ11名だった。

子どもと地域住民の交流を目的としたお餅つき大会

・実施日：平成31年3月23日（土）
参加者は子ども15名、親・地域住民・ボランティアスタッフ21名だった。

実施効果

子ども食堂では通常、16時からボランティアスタッフが集まって夕食の準備を始め、17時からは随時来所する子どもたちの学習支援を行うことにしている。12月からそろばんを導入したところ、学年を超えた子どもたちが互いに教え合いながら学ぶ姿が見られるようになった。
また、白木のお椀を購入したことから、みそ汁、豚汁等の汁物の登場回数が増え、お代わりをする子どもも多くなった。そして夕食後には、異年齢の子どもとボランティアスタッフが、ボードゲーム、カードゲーム、手芸などで遊びながら過ごすことも多くなった。
参加する子どものリピート率が高いせいもあって、ボランティアの学生や大人たちと一緒に時間を過ごす中で、子どもたちは人との交流を楽しみながら、コミュニケーション能力や協働する力を着実に付け、成長していると思う。



ボランティアに国際基督教大学（ICU）の留学生も参加



メニューの一例（右上は好評だった白木椀）

平成31年2月23日（土）、杏林大学井の頭キャンパスにおいて「杏林CCRCフォーラム公開講演会」と「第7回杏林CCRCフォーラム」を実施した。杏林CCRCフォーラムには、羽村市より並木心市長、三鷹市より清原慶子市長にもお越しいただき、ご挨拶を頂戴した。

【第1部】杏林CCRCフォーラム公開講演会

立正佼成会附属佼成病院の緩和ケア科・病棟医長の北村浩先生に講演をしていただいた。
医療用麻薬（モルヒネ）、世間一般では「中毒」「麻薬」という言葉を連想する方も多い中、痛みを緩和して普段と同じ生活ができるようになることを重視している。現代のがん医療についての知識面、課題面で参考になることが多かったと好評だった。
後半は杏林大学医学部腫瘍内科学 長島文夫教授に高齢社会と癌、CCRC研究所の取り組みについてお話しいただいた。高齢者でも治療をしながら米国旅行をした方の例をもとに、高齢社会が抱える様々な課題の解決や研究の発表も好評だった。

【第2部】第7回杏林CCRCフォーラム

平成30年度における様々な地域を舞台とした研究・貢献活動の報告を行った。また、今年度は同じ三鷹市内にある大学の国際基督教大学とルーテル学院大学から教職員・学生をお招きし、各大学で行っている地域貢献事業に関して発表と意見交換を行うなど、文字通り「大学と地域をつなぐ」機会を持ち、杏林大学と連携する羽村市、八王子市、三鷹市の関係者の他、一般の方を含む84名の参加者が集まった。
●研究発表
杏林CCRC研究所の指定研究3件、地域志向研究の中から2件の報告が、研究代表教員より発表された。
総合政策学部の三浦秀之准教授からはアメリカのポートランド州立大学と共に行った「Learn From Each Other

Program」について発表され、宮城県石巻市と三鷹市を舞台に行った防災を学ぶフィールドトリップについて説明された。このプログラムでは、三鷹市の協力のもと、ポートランドの学生たちが市立第一小学校の防災倉庫を見学する等、本学が地域活動の軸として貢献する「災害に備えるまちづくり」をじかに体験する良い学びの機会となった。

●ポスターセッション

地域志向教育の実践活動報告として、本学より20件、国際基督教大学より3件、ルーテル学院大学より5件の発表が行われた。会場には、ポスターを読む多くの参加者であふれ、ポスター作成者である教員や学生と熱心に意見交換が行われた。

●パネルディスカッション

杏林大学、国際基督教大学、ルーテル学院大学の教員の他、三鷹市企画部企画経営課職員、三鷹ネットワーク大学常務理事をパネリストに迎え、『地域活動の大学間連携の可能性』をテーマにディスカッションを実施した。市内3大学と三鷹市が一堂に会すのは初めてということもあり、互いに活動内容を発表しあうだけでなく、協働できる部分はあるのかといった面でも意見交換を行い、自治体を中心とした大学間連携の強化を視野に、様々な可能性について活発な話し合いが行われた。

●地域交流推進室 古本室長より総評

本学における『地の拠点整備事業』は平成29年度で終了したが、地域交流活動は今後も積極的に取り組んでいく。そのキックオフとすべく、今年度のフォーラムでは新たな取り組みをスタートさせた。まず、午前・午後の2部構成とし、午前中には杏林CCRC研究所の取り組みを講演会形式で公開し、午後を本学が取り組んでいる地域交流活動の成果をご覧いただく場とした。また、三鷹市内の大学である国際基督教大学、ルーテル学院大学にも活動紹介にご参加いただき、大学間での情報共有の機会とした。このフォーラムを契機に、大学間で連携した新たな地域交流活動が生まれてくることを期待している。



公開講演会



パネルディスカッション



ポスターセッション

その他の地域交流活動

種別	No.	行 事 名	実施期間	活動主体
健康	1	マインドフルネス・アクティビティ	平成30年 4 月～平成31年 1 月	総合政策学部
	2	臨床薬学研究会	平成30年 5 月16日	医学部
	3	Gynecologic Cancer Conference in Hachioji 2018	平成30年 6 月26日	医学部
	4	三鷹市医師会 平成30年度 三鷹市中高齢者の運動相談事業 「メディカルチェックと運動処方」	平成30年 8 月 6 日～ 8 月 9 日 8 月20日	保健学部
	5	北多摩IBD医療連携セミナー	平成30年 8 月30日	医学部
	6	北多摩開業医消化器内視鏡勉強会	平成30年10月13日	医学部
	7	地域ケアネットワーク井の頭 地域向け主催事業	平成30年10月13日	保健学部
	8	認知症にやさしいまち三鷹	平成30年11月17日	医学部、 医学部付属病院
	9	地域ケアネット合同事業	平成30年12月 2 日	保健学部
	10	144回世田谷区民のための健康教室	平成31年 1 月30日	医学部
	11	杏林漢方研究会	平成31年 2 月13日	医学部
	12	第28回山形県婦人科腫瘍研究会	平成31年 3 月 8 日	医学部
教健育康	13	がんと共にすこやかに生きる講演会 全 7 回	平成30年 4 月～平成31年 3 月	医学部付属病院
地域健康活性化	14	健康長寿講演会 杏林大学医学部付属病院と三鷹市老人クラブ連合会との 合同行事	平成30年11月30日 平成31年 2 月 5 日	医学部、 医学部付属病院
教育	15	大学コンソーシアム単位互換制度へ科目提供、 アドバンスト・プレイスメント対象科目	平成30年 4 月～ 7 月 平成30年 9 月～平成31年 1 月	総合政策学部
	16	講習会（ALSOプロバイダーコース）	平成30年 5 月 4 日、5 日	医学部
	17	羽村市立第 1、第 2、第 3 中学校 2 年生に 一次救命処置について講義及び実技の授業	平成30年 6 月15日	保健学部
	18	東京都理学療法協会 介護予防 健康増進キャンペーン	平成30年 7 月 1 日	保健学部
	19	第 3 回多摩眼科 3 Mネットワーク（講演会）	平成30年 7 月18日	医学部
	20	看護師・コメディカルの為のFIM講習会	平成30年 7 月22日 10月21日 12月16日	保健学部
	21	Ikiなまちかど保健室での健康教室	平成30年 8 月 6 日	保健学部
	22	夏！体験ボランティア2018 in みたか	平成30年 8 月20日～ 8 月24日	医学部付属病院
	23	羽村市家庭防災フェスティバル 講演会	平成30年11月18日	保健学部
	24	東京都理学療法士協会北多摩ブロック部 吸引研修会	平成30年12月 1 日	保健学部
育	25	羽村市国際理解講座での講義	平成30年12月16日	外国語学部
	26	第一回多摩循環器診察講習会	平成30年12月22日	医学部

種別	No.	行 事 名	実施期間	活動主体
教育	27	多摩肺高血圧症フォーラム	平成31年 1 月12日	医学部
	28	羽村市立羽村第一中学校校内研修会	平成31年 1 月16日	保健学部
	29	第14回MIFA国際交流フェスティバル（目黒区） 「世界ことば検定」	平成31年 1 月19日	外国語学部
	30	八王子学園都市大学いちよう塾 「〈文章〉の言語学～良文・悪文・文章の作法～」	平成31年 1 月28日 2 月 4 日、18日	外国語学部
	31	小学校特別授業 さいたま市立高砂小学校「人のたんじょう」での講演	平成31年 2 月27日	医学部
	32	日本母体救命システム普及協議会公認 （J-MELSベーシックコース）	平成31年 3 月23日	医学部
地域活性化	33	平成30年度 武蔵野市訪問看護・訪問リハビリテーション 事業者研修	平成30年 9 月28日	保健学部
	34	平成30年度 いのじんセミナー研修	平成30年10月13日 平成31年 2 月16日	保健学部
	35	平成30年度 社会福祉法人 東京弘済園職員研修	平成31年 2 月22日	保健学部
	36	平成30年度 社会福祉法人 東京弘済園地域住民向け研修	平成31年 3 月 3 日	保健学部
地域活性化	37	第13回三鷹市民公開講座 「腎臓について考えるフォーラム」	平成30年 5 月19日	医学部
	38	発達障がい児とその家族を対象とした余暇活動支援 「きらめきハッピーキャンプ2018」	平成30年 8 月25日～ 26日	保健学部、 外国語学部
	39	第 9 回 リウマチ膠原病教室	平成30年 9 月 1 日	医学部
	40	「口腔ケアと健康」： 高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プロ グラム 「都市型高齢社会におけるまちづくり」をテーマとした 必修科目の講義	平成30年12月 5 日	保健学部
その他	41	野村病院倫理委員会	平成30年 4 月 1 日～ 平成31年 3 月31日	保健学部

地域における社会貢献活動



いのじんセミナー研修「私の未来予想図－アドバンスケアプランニングで満足のいく最期のために自分の『希望』で描こう」



多摩肺高血圧症フォーラム

地域との連携 活動 ①

秋田県湯沢市・秋の宮温泉郷との 連携協定に基づく活動に参加

担当者名 古本 泰之 井手 拓郎（外国語学部）

概 要

秋田県湯沢市「秋の宮温泉郷イメージアップ推進協議会」と本学外国語学部では、協働で観光まちづくりの活動に取り組んでおり、平成24年には「まちづくり・観光事業に関する連携協定」を締結した。

協定による活動の一環として以下2つの「フィールドスタディ」（外国語学部科目）に取り組んだ。

（1）観光資源調査と現地関係者との意見交換

平成30年8月6日（月）～8月9日（木）に外国語学部古本泰之准教授と外国語学部生12名が湯沢市秋の宮地域を訪問し、「ジオパーク」の視察や秋田県立雄勝高等学校生徒との協働でのグリーンツーリズム体験、地域イベントの補助、意見交換などを行った。

（2）かだる雪まつりへの参加

平成31年1月31日（木）～2月4日（月）に外国語学部の井手拓郎准教授と外国語学部生12名が、第21回かだる雪まつり（秋田県湯沢市）に参加し、秋の宮地域の方々と一緒に「ミニかまくら」を作るなどのイベント支援を行った。

ねらい

秋の宮温泉郷との連携を推し進め、イベントの運営支援に携わりながら交流を図ることにより、地域と本学の双方が、お互いを高め合う関係を続けていく。同時に、現地との交流を通じて、観光による地域振興活動を学ぶ。

成 果

秋の宮温泉郷地域にとっては、これまで継続してきた本学との連携事業を通じて地元の価値を再発見・再評価する機会となっている。

8月のフィールドスタディでは、湯沢地域の観光の現状を把握し、関係団体と意見交換会を実施することで、着地型旅行商品造成への提言を行うことができた。

また、雪まつりについては、学生参加の事業として11年目を迎え、参加学生のうち2名はリピーターで、さらに本学の卒業生4名も積極的に参加を希望するなど、地域との深い絆が感じられる継続事業となった。活動の様子は、「あきたさきがけ新聞」（平成31年2月4日付）に掲載された。



「フィールドスタディⅠ」でのワークショップ



「フィールドスタディⅠ」でのジオパークの学び



秋の宮温泉郷の皆さまと作ったミニかまくら

地域との連携 活動 ②

三鷹市・羽村市・八王子市との連携

三鷹市 市内小学校との国際交流など

羽村市 中学生対象事業でのリーダー参加など

八王子市 学生による選挙啓発活動など

本学は東京都羽村市と三鷹市において相互の資源および研究成果等の促進することによる活力ある地域社会の創造や人材育成などを目的として、羽村市とは平成22年6月に、三鷹市とは平成25年9月に包括的な連携に関する協定を締結した。この包括連携協定は教育、生涯学習、まちづくり、地域の産業・文化の振興、健康・福祉等の分野において連携し協力していくものである。また、八王子地域は25の大学・短大・高专がある学園都市であり、本学は平成21年4月から大学コンソーシアム八王子に加盟し、生涯学習の推進や情報の発信、学生と市民の交流、外国人留学生の支援などの事業に取り組んでいる。

三鷹市

平成29年8月に(株)アトレとの地域貢献パートナーに関する協定を締結し、平成30年度もアトレヴィ三鷹と多くの協働事業をすすめた。総合政策学部、外国語学部、保健学部の教員・学生が、食・情報・健康・文化などに関するテーマで活動を展開した。市との連携も深まり、教育委員会を通じた、「みたか地域未来塾」への学習支援員の派遣やその他の連携事業を継続実施した。

●三鷹市立南浦小学校での国際交流について

平成30年9月6日、及び平成31年3月7日に本学で学ぶ留学生が三鷹市立南浦小学校を訪問し、5年生の英語の授業にボランティアとして参加した。

授業では留学生が英語で自己紹介をした後、児童一人ひとりと英語で挨拶をした。続いて英語でのビンゴゲームがあり、その後グループに分かれて自由に英語を楽しんだ。

2回目の3月に訪れた際には再会を喜ぶ場面も見られ、南浦小学校の5年生からは「前回よりも英語で話すことができたようになった」「会話が续くようになった」等の声があがった。

平成28年から始まった南浦小学校と杏林大学との交流は、小学生と外国人留学生の双方にとって楽しく貴重な機会であり、今後も継続していく方針である。



ロコモ予防チャレンジ講座

●ロコモ予防チャレンジ講座

平成30年9月8日、三鷹市公会堂さんさん館にて、「ロコモ予防チャレンジ講座」を開催した。65歳以上の三鷹市民を対象にした健康に関する講義、運動の指導、体力測定を行う講座へ本学保健学部学生2名が参加し、測定や会場設営の手伝いを行った。

（※ロコモ…骨や関節・筋肉など運動器の衰えが原因で歩行や立ち座りなどの日常生活に障害をきたしている状態）

参加学生からは「学外活動は面識のない方とのコミュニケーションや人に指導する等、非常に良い経験になった」と感想が寄せられた。

●必修科目「地域と大学」での発表

平成30年11月2日、三鷹キャンパス第一講堂で100名を超える医学部1年生による「地域と大学」の発表会が行われた。「地域と大学」は1年生の必修科目で地域における大学の役割、地域を取り巻く課題や地域の学び方など、包括的に取り組む科目である。

学生は4月から始動し、座学やグループワークに加え、実際に足を運んで施設見学や地域の方へお話を伺うフィールドワークなど、約半年間の期間を通して活動してきた。

その中で発見できた地域課題や地域を基に自分たちの見解や考え得る施策をまとめ、集大成として16グループそれぞれが設定したテーマでプレゼンテーションを行った。2年次以降は自らの専門分野である医療を学びつつ、その知識を基に様々な講義を通じて地域課題に取り組んでいくことになる。



「地域と大学」医学部発表会

三鷹市 平成30年度ボランティア参加一覧（一部掲載）

No.	活 動 名 称	実 施 期 間	学 部
1	春の全国交通安全運動 三鷹警察署 出陣式	平成30年 4 月 6 日	保健学部
2	極低出生児親の会 びあんず	平成30年 5 月19日、 7 月14日、 10月13日 平成31年 2 月23日	保健学部・医学部
3	三鷹国際交流ウォークラリー	平成30年 5 月20日	外国語学部
4	三鷹市老人クラブロコモティブシンドローム測定会	平成30年 6 月23日、 9 月 8 日、 9 月30日 平成31年 3 月 2 日	保健学部
5	選挙啓発のための模擬投票	平成30年 7 月14日	総合政策学部
6	きらめきハッピーキャンプ	平成30年 7 月14日	保健学部・外国語学部
7	井の頭キャンパス健幸ストレッチ教室	平成30年 7 月21日、11月17日、 9 月22日 平成31年 2 月23日	保健学部
8	鷹南学園 三鷹市立中原小学校 チャレンジ・キャンプ	平成30年 8 月25日～ 8 月26日	外国語学部・大学院
9	パラリンピック種目 ボッチャを楽しもう	平成30年 8 月28日	保健学部
10	少年野球練習補助ボランティア	平成30年10月13日～平成31年 3 月31日	保健学部
11	鷹南学園 コミュニティスクール 鷹南っこ生きる力育みプログラム 異文化交流「留学生と遊ぼう」	平成30年11月 4 日	外国語学部・大学院
12	三鷹防災マルシェ	平成31年 3 月10日	保健学部

羽村市

第 5 回にぎわい音楽祭実行委員会、青梅・羽村ピースメッセンジャー、学生講座企画など、教育的な地域貢献活動を展開することができた。また、羽村市スポーツセンターにおいて、健康寿命延伸をはかるための支援活動「生涯スポーツの機会提供プログラム」が実施された。

- 青梅・羽村ピースメッセンジャー事業広島への中学生派遣
平成30年 8 月 4 日～ 6 日、青梅・羽村市ピースメッセンジャー事業（羽村市と青梅市の中学生を広島へ派遣する平和事業）に学生リーダーとして総合政策学部生 2 名・外国語学部生 1 名が参加した。
青梅市と羽村市では共同事業として、両市の中学生を原爆が投下された広島へ派遣し、戦争の悲惨さや平和の大切さを体験として心で感じ取り、主体的に発信できる人材を育成することを目的として、ピースメッセンジャー事業を実施している。
本学学生がリーダー研修等を経て活動を迎え、貴重な体験ができたことに学生からは感謝の意が示され、『「平和とは何か」ということについて考えを深めることができた」等、感想を伝えてくれた。

- 第49回羽村市産業祭
平成30年11月 3 日・ 4 日、羽村市富士見公園で第49回羽村

市産業祭が開かれ、本学学生16名が参加した。市内の諸産業と消費者団体が一堂に会し、その活動や取組みを紹介するイベントで、市内の産業振興に加え、市民と産業の融和を図っている。その中で学内公募で 4 名の学生がハロウィンブースの運営補助やごみの分別指導を、総合政策学部木暮セミナーから12名の学生がオリンピック・パラリンピック気運醸成ブースの充実化に向けた企画の提案及び運営を行ってきた。
羽村市担当の方からは「企画の充実化に繋がり様々な年代の方にブース内を楽しんでいただけました」とコメントをいただいた。



青梅・羽村ピースメッセンジャー事業に参加した学生達



第49回羽村市産業祭

羽村市 平成30年度ボランティア参加一覧

No.	活 動 名 称	実 施 期 間	学 部
1	羽村市健康の日	平成30年 5 月20日	保健学部
2	羽村市環境フェスティバル	平成30年 6 月 2 日	外国語学部
3	第43回 はむら夏祭り	平成30年 7 月28日	外国語学部
4	東京2020 パラリンオリンピックを応援しよう	平成30年 8 月25日	保健学部
5	羽村市・杏林大学共催 運動健康増進プログラム	平成30年 8 月25日、12月22日 平成31年 2 月 9 日	保健学部
6	歩き方教室	平成30年10月27日	保健学部
7	第49回 羽村市産業祭	平成30年11月 3 日～ 11月 4 日	総合政策学部・外国語学部
8	第 5 回 羽村にぎわい音楽祭	平成30年12月 2 日	保健学部・総合政策学部・外国語学部

八王子市

平成30年度は継続して大学コンソーシアムの事業に参画し、教育活動・社会貢献活動を実施した。
JR八王子駅北口西放射線ユーロードで開催される第13回学生天国において、HIVに関する情報提供や、選挙啓発活動などを行い、地域と大学間の連携を推進することができた。

- 第13回学生天国
平成30年 5 月13日、JR八王子駅北口西放射線ユーロードで開催される第13回学生天国においてマジッククラブの参加やHIVに関する情報の提供活動、選挙啓発のための模擬投票を行った。
活動に参加した総合政策学部の学生からは「活動を通して様々な幅広い年齢層の人に正しい知識や情報を伝えることができた」「小中学生とその保護者、社会人の方に興味を持って模擬投票をしてもらうことができた」等、感想が寄せられた。
- 外国語学部「プロジェクト演習Ⅱ」に伴う八王子市での調査
平成30年12月 6 日・ 7 日、外国語学部学生 2 名が八王子市での調査で「はちおうじ学生都市ビジョンは現在どのように機能していて、今後どのような方向性を目指しているのか」をテーマに八王子在住者へのインタビュー調査を行った。

学生からは「八王子市役所職員の方にインタビューをしました。初めての経験だったので苦戦した部分もありましたが非常に達成感を味わうことができました。八王子市は自然環境が良く、利便性があり産業資産が豊富なのでビジネスチャンスがあると感じました」等、感想が寄せられた。



第13回学生天国

八王子市 平成30年度ボランティア参加一覧

No.	活 動 名 称	実 施 期 間	学 部
1	HIV感染予防に関する情報提供 (第13回 学生天国)	平成30年 5 月13日	総合政策学部
2	選挙啓発のための模擬投票 (第13回 学生天国)	平成30年 5 月13日	総合政策学部
3	保育園ボランティアー千人保育園ー	平成30年 7 月 7 日	保健学部
4	南多摩医療と地域と介護をつなぐ第14回フォーラム	平成31年 1 月20日	保健学部
5	学校ボランティアー八王子市立第三小学校ー	毎 火曜又は木曜日	保健学部

公開講演会・公開講座

本学では平成30年度において、大学が持つ知的資源をより広く地域住民に還元するため、地（知）の拠点整備事業のテーマである「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」を継承したテーマの他、知識や教養に結びつく多数の公開講演会を実施した。

本学井の頭キャンパス、三鷹キャンパスのほか、三鷹市・三鷹ネットワーク大学、羽村市・羽村市生涯学習センターゆとろぎ、羽村市コミュニティセンター、八王子市・八王子市学園都市センターを会場として、計23回開催したが、いずれの講演会にも多数の聴講者が来場し、おおむね好意的な評価が寄せられた。

平成30年度杏林大学公開講演会

No.	日程	時間	講演タイトル	講 師	開催場所
1	5月12日（土）	13:30-15:00	乳がん検診の最新事情	保健学部 学内講師 森 美加	井の頭キャンパス
2	5月19日（土）	14:00-16:00	高齢者のめまい・ふらつき・難聴について 知ろう！ ―健康に生きるために	医学部 講師 増田 正次	三鷹キャンパス
3	5月26日（土）	10:30-12:00	脳卒中から身を守る ―こんなに進んだ治療と予防	医学部 教授 平野 照之	三鷹キャンパス
4	6月9日（土）	13:30-15:00	心臓発作の救急対応 ―起こった時どうするか、 起こらないようにするにはどうするか	医学部 特任教授 吉野 秀朗	三鷹キャンパス
5	6月30日（土）	14:00-16:00	ことばの能力～日本語再考	外国語学部 教授 金田一秀穂	羽村市生涯学習センター ゆとろぎ
6	7月21日（土）	14:00-15:30	“ロコモ”を知って健康寿命をのぼそう！	医学部 教授 市村 正一 付属病院長	三鷹ネットワーク大学
7	9月1日（土）	13:30-15:00	進化するキズの治療法	医学部 教授 大浦 紀彦	三鷹キャンパス
8	9月15日（土）	10:30-12:00	肺がん治療の進歩 ―自分に適した治療を選択する	医学部 学内講師 横山 琢磨	井の頭キャンパス
9	9月15日（土）	13:30-15:00	知って得する！ 糖尿病に関するあれこれ	医学部 講師 近藤 琢磨	井の頭キャンパス
10	9月29日（土）	10:00-11:30	温泉マークは世界で通じるか？ ―街の公共サインを点検しよう	外国語学部 准教授 倉林 秀男	三鷹ネットワーク大学
11	10月6日（土）	14:00-15:30	ゲノム医療の時代 乳癌診療の急展開	医学部 教授 井本 滋	三鷹ネットワーク大学
12	10月27日（土）	10:30-12:00	超高齢化社会の風邪と肺炎	保健学部 教授 小林 治	井の頭キャンパス
13	10月27日（土）	13:30-15:00	糖尿病網膜症	医学部 講師 厚東 隆志	井の頭キャンパス
14	11月17日（土）	13:30-15:30	脈のはなし 早い脈と遅い脈	医学部 教授 副島 京子 医学部 特任准教授 佐藤 俊明 医学部 特任講師 上田 明子	三鷹キャンパス
15	11月24日（土）	13:30-15:00	龍馬の夢を挫いた男 ―勝海舟に届いた手紙	総合政策学部 教授 松田 和晃	八王子学園都市 センター
16	12月8日（土）	13:30-15:00	エイズ流行の終えんに向けた取り組み	総合政策学部 教授 北島 勉	三鷹キャンパス
17	12月15日（土）	10:30-12:00	唱歌の言葉と表現 ―日本の風景・日本人の心―	外国語学部 教授 玉村 禎郎	井の頭キャンパス
18	12月22日（土）	14:00-15:30	アメリカ中間選挙とトランプ政権	総合政策学部 講師 島村 直幸	三鷹ネットワーク大学
19	平成31年 1月12日（土）	13:30-15:00	思春期の子どもとの関わり方、 夫婦の関わり方	保健学部 教授 村部 妙美	井の頭キャンパス
20	1月19日（土）	13:30-15:00	前立腺肥大症と尿路結石って何だろう？ ―今日、その疑問にお答えします！	医学部 講師 多武保光宏	八王子学園都市 センター
21	1月29日（火）	13:30-15:30	自分で守る！ メンタルヘルス ―ストレスを味方にする考え方と生活のポイント	名誉教授 古賀 良彦	羽村市生涯学習センター ゆとろぎ
22	2月9日（土）	14:00-16:00	最期まで住み慣れた地域で暮らし続けるために ―在宅医療や介護で受けられるサービスを知ろう	保健学部 准教授 柴崎 美紀	羽村市 コミュニティセンター
23	2月23日（土）	14:00-16:00	みんなで支えるがん医療 ―モルヒネ使ったらおしまいってホント？― ―ライフステージ―（高齢者）	杏林大学付属病院 専修医 北村 浩 医学部 教授 長島 文夫	井の頭キャンパス

平成30年度八王子学園都市大学・いちょう塾【前期 4月～ 7月】

No.	日程	時間	講 座 名	講 師
1	4月4日～ 7月11日 8回（各回水曜日）	15:20-16:50	文明論で迫る西欧 ～日欧比較を踏まえ～	外国語学部 元客員教授 上野 景文
2	4月5日～ 7月19日 15回（各回水曜日）	13:00-14:30	国際経済学B（金融）	総合政策学部 教授 西 孝
3	4月5日～ 7月19日 15回（各回木曜日）	16:20-17:50	生命倫理学 ～障害児と障害者の健康と福祉を考える～	保健学部 教授 加藤 英世
4	4月7日～ 6月23日 10回（各回土曜日）	13:30-15:00	近世小説の世界 ～西鶴の『好色一代男』を読む～	外国語学部 元教授 草場 裕
5	4月7日～ 6月23日 10回（各回土曜日）	15:20-16:50	古今悪女譚 ～中国古典、日本近世小説にみる悪女～	外国語学部 元教授 草場 裕
6	4月9日～ 7月23日 15回（各回月曜日）	10:40-12:10	マクロ経済学	総合政策学部 教授 西 孝
7	4月9日～ 7月23日 15回（各回月曜日）	10:40-12:10	日本語教育学特論Ⅰ/日本語教授法概論 ～語学教授法の歴史～	外国語学部 教授 荒川みどり
8	4月12日～ 6月7日 7回（各回木曜日）	13:30-15:00	シェイクスピアの世界（19） ～『から騒ぎ』―嘘と真実、涙と笑いのカルテット～	外国語学部 元教授 川地 美子
9	4月19日～ 5月17日 3回（各回木曜日）	15:20-16:50	いちから分かるシェイクスピア	外国語学部 元教授 川地 美子
10	7月4日～ 7月18日 3回（各回水曜日）	15:20-16:50	高齢者のための運動のポイント ～いつまでも健やかであるために～	保健学部 准教授 榎本 雪絵

平成30年度八王子学園都市大学・いちょう塾【後期 9月～ 2月】

No.	日程	時間	講 座 名	講 師
1	9月24日～平成31年1月21日 15回（各回月曜日）	10:40-12:10	児童英語教育実習 ～子どもに英語を指導する方法と技術～	外国語学部 講師 小林 輝美
2	9月24日～平成31年1月21日 15回（各回月曜日）	10:40-12:10	日本語教育学特論Ⅱ ～日本語教育の歴史～	外国語学部 教授 荒川みどり
3	10月25日～ 12月6日 7回（各回木曜日）	13:30-15:00	シェイクスピアの世界（20） ～問題劇『トロイラスとクレシダ』における問題とは？～	外国語学部 元教授 川地 美子
4	10月31日～ 12月12日 6回（各回水曜日）	15:20-16:50	西欧と日本 ～日欧の文明を比較すれば～	外国語学部 元客員教授 上野 景文
5	平成31年1月28日～ 2月18日 3回（各回月曜日）	18:30-20:00	<文章>の言語学 ～良文・悪文・文章の作法～	外国語学部 准教授 八木橋宏勇

平成30年度三鷹市民聴講生講座【前期 4月～ 7月】

No.	日程	時間	講 座 名	講 師
1	4月6日～ 7月20日 15回（各回金曜日）	16:20-17:50	英語学特論Ⅲ	外国語学部 准教授 八木橋宏勇
2	4月10日～ 7月24日 15回（各回火曜日）	13:00-14:30	英語学演習Ⅰ	外国語学部 教授 稲垣 大輔

平成30年度三鷹市民聴講生講座【後期 9月～ 1月】

No.	日程	時間	講 座 名	講 師
1	9月21日～平成31年1月18日 15回（各回金曜日）	16:20-17:50	英語学演習Ⅳ	外国語学部 准教授 八木橋宏勇
2	9月24日～平成31年1月21日 15回（各回月曜日）	14:40-16:10	時事問題研究B	総合政策学部 講師 島村 直幸
3	9月25日～平成31年1月15日 15回（各回火曜日）	13:00-14:30	グローバル人材論（英）	外国語学部 教授 黒田 有子
4	9月25日～平成31年1月15日 15回（各回火曜日）	13:00-14:30	英語学特論Ⅱ	外国語学部 教授 稲垣 大輔
5	9月25日～平成31年1月15日 15回（各回火曜日）	16:20-17:50	高齢保健学	保健学部 准教授 岡本 博照

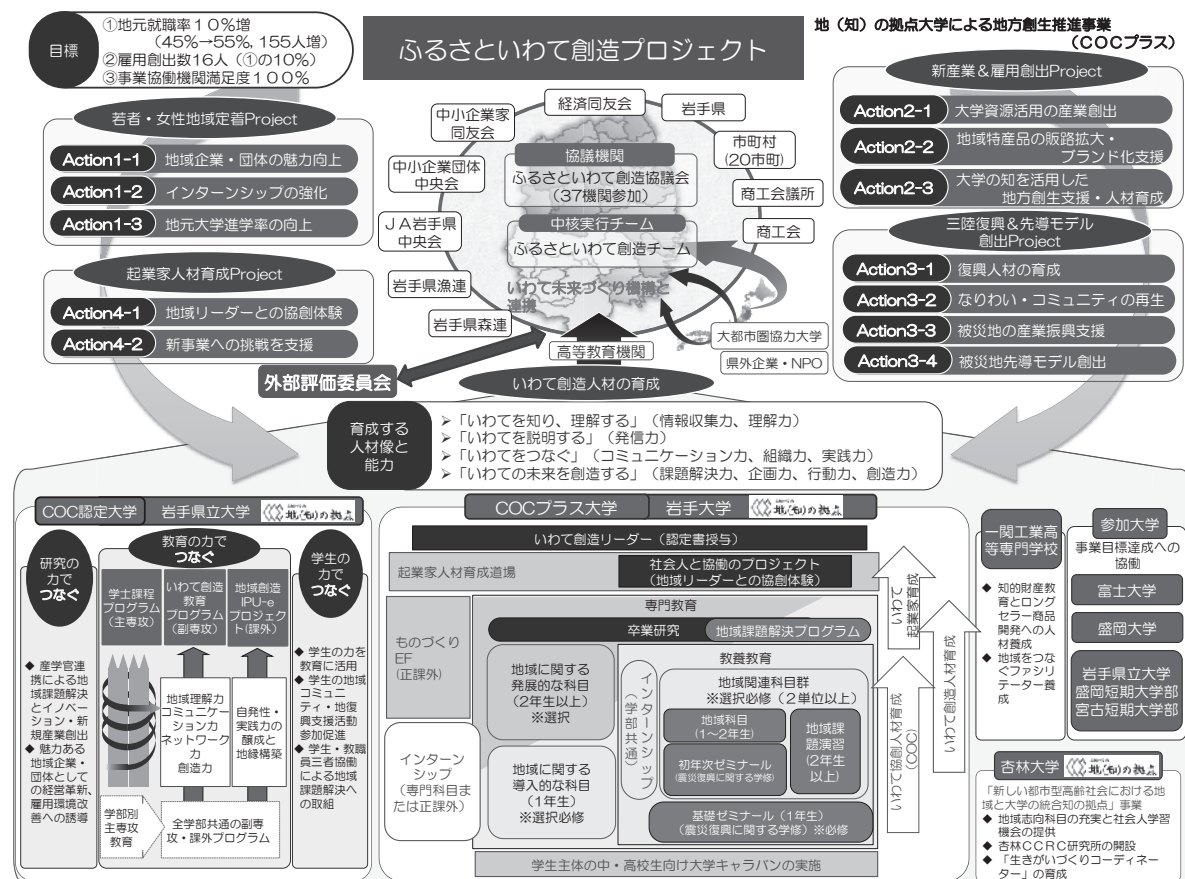
「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」

地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの
改革を行う大学の取り組みを支援

各大学が地方公共団体や企業等と協働して学生にとって魅力ある就職先の創出をするとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革を断行する大学の取り組みを支援することを目的とした事業である。平成25年度からの「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」を発展させたものとして、平成27年から開始された。

本学では平成27年度から、「COC+大学」（事業責任大学）である岩手大学がすすめる「ふるさとといわて創造プロジェクト」事業に「COC+参加校」として取り組み、活動を展開している。具体的には、岩手県をフィールドとした授業の実施や岩手県出身学生に対する就職支援、岩手県へのインターンシップ派遣等、首都圏大学の役割としてその地域が求める人材の育成を行っている。

ふるさとといわて創造プロジェクトの概要



ふるさと発見！大交流会 in Iwate 2018

平成30年12月15日（土）、岩手県滝沢市の岩手産業文化センターにおいて、「ふるさと発見！大交流会 in Iwate 2018」が岩手大学主催で開催された。開催の目的は学生自らが生き方・働き方を主体的に考える学びの場を提供すること、将来的に地元就職への機運向上を図ること、多種多様な参加者同士の交流からイノベーション創出の機会を提供することとして開催された。本学は本事業の参加大学として、岩手県内の企業や行政、NPO法人、岩手県内の高等教育機関等に交じって参加しており、出展ブースは総数で205ブースに上った。参加者数は1,700名であり、改めて岩手の魅力に気づいたり、将来についてのイメージを持つ機会となったようだ。

本学からは学生3名（保健学部生2名、外国語学部生1名）と地域交流課職員が参加した。学生にはそれぞれの所属する学部学科の立場から、本学（首都圏に所在する大学）でどのようなことを学んでいるか、どのようなことが学べるのか、また、その学びが岩手県（地方都市）においてどのように還元できるか／役立てられるのかを来場した高校生や大学生、企業関係者等々を対象にプレゼンテーションを行った。

参加した学生からは、「慣れない場所で全く知らない人たちを相手にプレゼンするのは緊張したが、参加した人たちが耳を傾けてくれて、良い雰囲気の中で発表することが出来た」「他大学の先生が興味を持って発表を聞いて下さったことが嬉しかった。杏林大学での学びが、地域のために広く役立てられていることを知ってもらう良い機会になったと思う」「他学部他学科の学習について知る機会が無かったので、それぞれの学科の面白いところや授業の様子などを聞くことが出来て、参加者同士の交流にもつながった」との感想が寄せられ、学



大交流会に参加した学生達



フィールドスタディⅣ 関係者からの説明

生にとっても学生間・大学間の交流を経験できた良い機会となったようだ。

外国語学部選択科目「フィールドスタディⅣ」

岩手大学を中心とする大学COC+事業「ふるさとといわて創造プロジェクト」への参加をきっかけに、震災復興に取り組む東北地方の地域を舞台に学生たちが地方創生について学ぶ実習を、「フィールドスタディⅣ」として実施している。

平成30年度は、福島県相馬市を舞台とし、相馬市役所・相馬市観光協会・福島県相馬地方振興局・松川浦観光振興グループのご協力の下、「復興」と「観光まちづくり」について平成31年2月4日（月）～7日（木）の3泊4日の日程での学習機会を設けた。

相馬市は面積197.7km²・人口35,307人（平成31年1月末現在）の地域で、少子高齢化に伴う過疎化への対応が迫られる中で東日本大震災が発生し、地域を支えてきた第一次産業に大きな被害が及んでいる。このフィールドスタディでは、事前学習および相馬市関係者との協議に基づき、学びのテーマを「観光地の復興における現状と課題」「外部者の地域内での活動とその意義」「新たな産業としての6次産業の可能性と課題」に絞り込んで各被災地の視察やヒアリング調査を行うとともに、自分たちの考える振興プランを発表することで、被災地域の復興と観光まちづくりについて考察する場とした。

学生たちには、東日本大震災の被害、特に福島第一原子力発電所事故の影響、そこからの「再生」を目指す方々の取り組みを知ることで、学内での学びをより深める機会となった。

なお、本実習の内容については福島民報（2月8日）および福島民友新聞（2月10日）に掲載された。



大交流会の本学ブース前で



フィールドスタディⅣに参加した学生達

授業への招聘

件名	日程	場所	招聘者	内容
必修科目 「地域と大学」に招聘	平成30年 7月20日(金)	杏林大学 井の頭 キャンパス	岩手大学 小野寺純治（特任教授） 赤木 徳顕（特任教授） 船場ひさお（特任准教授）	総合政策学部、外国語学部の1年必修科目「地域と大学」において、岩手大学のCOC+の取り組みや地方創生への関わりについて、講義をしていただいた。

会議、現地訪問等への参加

件名	日程	場所	出席者	内容
ふるさといわて創造協議会運営委員会	平成30年 5月17日(木)	岩手大学	依田千春（地域交流課長）	ふるさといわて創造協議会運営委員会へ出席し、本学の取り組みについて述べた。
ふるさといわて創造プロジェクト外部評価委員会	5月28日(月)	岩手大学	古本泰之（地域交流推進室長）	ふるさといわて創造プロジェクト外部評価委員会へ出席。COC+コーディネーターからの事業概要説明に続き外部評価委員からの質疑が行われた。
岩手大学開学記念講演会	6月2日(土)	岩手大学	古本泰之（地域交流推進室長）	「ふるさといわて創造プロジェクト」実施校である岩手大学の69回目の開学記念講演会への出席した。
ふるさといわて創造協議会全体会議	6月20日(水)	岩手大学	大瀧純一（杏林大学長） 古本泰之（地域交流推進室長）	ふるさといわて創造協議会全体会議へ出席し、本学の取り組みについて述べた。
ふるさといわて創造協議会教育プログラム開発部会	7月18日(水)	岩手大学	深沢貴沙（地域交流課）	ふるさといわて創造協議会教育プログラム開発部会議へ出席し、本学の取り組みについて述べた。
ふるさといわて創造協議会 ふるさといわて創造部会 及び作業部会	9月7日(金)	いわて県民 情報交流センター	古本泰之（地域交流推進室長）	ふるさといわて創造部会及び作業部会へ出席し、本学の取り組みについて述べた。
ふるさといわて創造協議会教育プログラム開発部会	10月12日(金)	岩手大学	古本泰之（地域交流推進室長）	ふるさといわて創造協議会では部会を組織して開催され議題により部会を切り替えて行われ、開発部会に出席し、本学の取り組みについて述べた。
ふるさといわて創造協議会教育プログラム開発部会・作業部会	11月19日(月)	岩手大学	深沢貴沙（地域交流課）	ふるさといわて創造協議会では部会を組織して開催され議題により部会を切り替えて行われ、作業部会に出席し本学の取り組みについて述べた。
「ふるさと発見！大交流会 in Iwate 2018」	12月15日(土)	岩手産業文化センター	深沢貴沙（地域交流課） 池田蘭奈（保健学部3年） 佐々莉奈（保健学部3年） 那須野昌（外国語学部3年）	地元就職への機運の向上、イノベーション創出の機会提供を目的として開催された交流会に参加し、学生達が活動・体験した地域での学びを紹介した。
COC+事業に伴う岩手県との交流教育事業に関する打ち合わせ	平成31年 1月10日(木)～11日(金)	岩手県 釜石市役所	古本泰之（地域交流推進室長）	外国語学部の選択科目「フィールドスタディⅣ」で舞台となった釜石市の職員ならびに岩手大学とその状況及び成果報告に関する打ち合わせを実施した。
ふるさといわて創造協議会研修事業「課題解決（PBL）型授業体験ー学生の課題解決力&地域理解の向上」	1月18日(金)	岩手大学	依田千春（地域交流課長）	学生・教員が企業・自治体の具体的課題を学び、地域と共に課題解決に取り組む機会を設けることにより相互理解を深め、自治体・企業等参加型の授業開講へのマッチングを図ることを目的とした研修へ参加した。

会議、現地訪問等への参加

件名	日程	場所	出席者	内容
ふるさといわて創造協議会教育プログラム開発部会	平成31年 1月22日(火)～23日(水)	岩手大学	古本泰之（地域交流推進室長）	ふるさといわて創造協議会では部会を組織して開催。該当部会に出席し本学の意見等を述べた。
ふるさといわて創造協議会教育プログラム開発部会・作業部会	2月28日(木)	岩手大学	深沢貴沙（地域交流課）	ふるさといわて創造協議会では部会を組織して開催。該当部会に出席し本学の意見等を述べた。
ふるさといわて創造協議会教育プログラム開発部会	3月25日(月)	岩手大学	深沢貴沙（地域交流課）	ふるさといわて創造協議会では部会を組織して開催。該当部会に出席し本学の意見等を述べた。
ふるさといわて創造協議会運営委員会及びふるさといわて創造部会	3月29日(金)	岩手大学	古本泰之（地域交流推進室長）	ふるさといわて創造協議会では部会を組織して開催。該当部会に出席し本学の取り組みや意見等を述べた。

インターンシップ、就職等に関する情報提供・参加

件名		日程	場所	出席者	内容
実践型インターンシップの告知	総合政策学部1年：「ライフ・プランニング」総合政策学部3年：「キャリア開発演習Ⅰ」	平成30年 5月9日(水)	杏林大学 井の頭 キャンパス	総合政策学部1・3年生 キャリアサポートセンター	キャリアサポートセンター職員が授業の一部やセミナー開催時にNPO法人wizの主催する実践型インターンシップについてチラシを配布し説明周知した。
	総合政策学部2年：「キャリア開発論Ⅰ」	5月11日(金)		総合政策学部2年生 キャリアサポートセンター	
	外国語学部3年：「キャリアデザインⅢ」外国語学部2年：「キャリアデザインⅠ」	5月23日(水)		外国語学部2・3年生 キャリアサポートセンター	
	総合政策学部・外国語学部各学部1-3年：「LO活インターンシップ準備講座」	6月1日(金)		総合政策学部1-3年生 外国語学部 1-3年生 キャリアサポートセンター 地域交流課	
実践型インターンシップ説明会	総合政策学部3年：「キャリア開発演習Ⅱ」〈LO活セミナー〉	10月17日(水)		総合政策学部3年生 キャリアサポートセンター 地域交流課	キャリアサポートセンター職員が授業の一部でNPO法人wizの主催する実践型インターンシップについてチラシを配布し説明周知した。
実践型インターンシップの告知	外国語学部3年：「キャリアデザインⅣ」外国語学部2年：「キャリアデザインⅥ」	11月14日(水)		外国語学部2・3年生 キャリアサポートセンター	
	外国語学部1年：「観光学入門」	11月20日(火)		外国語学部1年生 キャリアサポートセンター 地域交流課	
	総合政策学部1年：「ライフプランニングⅡ」	11月21日(水)		総合政策学部1年生 キャリアサポートセンター 地域交流課	NPO法人wiz 担当者が授業の一部でNPO法人wizの主催する実践型インターンシップについてチラシを配布し説明周知した。

COC+実績報告③

平成30年度
杏林CCRC拠点推進委員会開催記録

回	日 程	場 所	議 題
第 1 回	4月16日(月)	三鷹キャンパス 本部棟 6 階	〈報 告〉 1. 平成30年度予算について 2. 平成29年度実績報告書の提出について（報告書 4 / 6、決算書 4 /25） 3. 杏林CCRC研究所紀要Web公開について 4. 平成30年度公開講演会について 5. その他 ・杏林CCRC研究所 看護・医学教育研究棟 1 階116号室 内線6110 〈協 議〉 1. 杏林CCRC指定研究の募集について 2. 地域活動助成費【研究】の募集について 3. 平成30年度杏林CCRC拠点推進委員会開催日程（案）について
第 2 回	6月18日(月)	三鷹キャンパス 本部棟 6 階	〈報 告〉 1. 公開講演会について ・ 5 /12（土）乳がん検診の最新事情 保）森(美)先生 53名 ・ 5 /19（土）杏林医学会主催） 高齢者のめまい・ふらつき・難聴について知ろう！ 一健康に生きるために 座長 医）増田先生 340名 ・ 5 /26（土）脳卒中から身を守る一こんなに進んだ治療と予防 医）平野先生 178名 ・ 6 /9（土）心臓発作の救急対応一起こった時どうするか、起こらないように するにはどうするか 医）吉野先生 154名 2. 平成30年度予算について 3. 平成29年度実績報告書の提出について（決算書 4 /25） 4. 平成29年度フォローアップの提出について 5. 杏林CCRC指定研究、地域活動助成費【研究】の採択について 6. ポートランド州立大学の訪日フィールドトリップ、公開講演会について 7. COC+における保健学部・医学部の活動可能性について 8. COC+ UIターン発足イベント開催について 9. COC+ 出張報告について 10. COC+ 2018夏季IWATE実践型インターンシップについて 11. COC+ 平成30年度岩手県内事業所見学バスツアーの開催について 〈協 議〉 1. COC+「ふるさといわて大交流会 in Iwate 2018」について
第 3 回	10月15日(月)	三鷹キャンパス 本部棟 6 階	〈報 告〉 1. 公開講演会について ・ 6 /30（土）ことばの能力～日本語再考 外）金田一先生 212名 ・ 9 /1（土）進化するキズの治療法 医）大浦先生 113名 ・ 9 /15（土）肺がん治療の進歩—自分に適した治療を選択する 医）横山先生 63名 ・ 9 /15（土）知って得する！糖尿病に関するあれこれ 医）近藤先生 101名 ・ 9 /29（土）温泉マークは世界で通じるか？—街の公共サインを点検しよう 外）倉林先生 29名 ・ 10 /6（土）ゲノム医療の時代 乳癌診療の急展開 医）井本先生 62名 2. 予算執行状況について 3. 平成29年度地域志向教育研究費の事後評価について 4. COC+ 出張報告について（6 /20古本、7 /18深沢、9 /7 古本） 5. 岩手県出身学生の在籍状況について 6. 岩手大学教員による「地域と大学」について（7 /20） 7. COC全学アンケート結果について 8. COC+における保健学部・医学部のH31年度活動について 9. 第三者評価委員会について（10/26（金）10：30～） 10. 平成29年度成果報告書について（8 月発行、配付済） 〈協 議〉 1. 平成30年度COC+ 予算の用途について 2. 平成30年度杏林CCRCフォーラムについて

回	日 程	場 所	議 題
第 4 回	12月17日(月)	三鷹キャンパス 本部棟 6 階	〈報 告〉 1. 公開講演会について ・ 10/27（土）超高齢化社会の風邪と肺炎 保）小林先生 146名 ・ 10/27（土）糖尿病網膜症 医）厚東先生 95名 ・ 11/17（土）杏林医学会主催）脈のはなし—早い脈と遅い脈 医）副島先生、佐藤（俊）先生、上田先生 186名 ・ 11/24（土）龍馬の夢を挫いた男—勝海舟に届いた手紙 総）松田先生 111名 ・ 12/ 8（土）エイズ流行の終えんに向けた取り組み 総）北島先生 32名 ・ 12/15（土）唱歌の言葉と表現—日本の風景・日本人の心— 外）玉村先生 68名 2. 予算執行状況について 3. H30年度杏林CCRCフォーラムについて 4. 第三者評価委員会について 5. COC+ 出張報告について（10/12古本、11/19深沢） 6. COC+「ふるさと発見！大交流会 in Iwate 2018」参加について 7. COC+ 2019春季IWATE実践型インターンシップについて 8. COC+ いわてキボウスター開拓塾の創業機運醸成賞受賞について 9. COC+ 滝沢市企業等見学バスツアーについて（1 /18） 10. COC+ 単位互換制度「いわて創造人材」育成プログラムへの科目提供について 〈協 議〉 1. 人事関係について（杏林CCRC研究所）
第 5 回	平成31年 2月18日(月)	三鷹キャンパス 本部棟11階	〈報 告〉 1. 公開講演会について ・ 12/22（土）アメリカ中間選挙とトランプ政権 総）島村先生 53名 ・ 1 /12（土）思春期の子どもとの関わり方、夫婦の関わり方 保）村部先生 19名 ・ 1 /19（土）前立腺肥大症と尿路結石って何だろう？ —今日、その疑問にお答えします！ 医）多武保先生 112名 ・ 1 /29（土）自分で守る！メンタルヘルス—ストレスを味方にする考え方と 生活のポイント 古賀名誉教授 60名 ・ 2 /9（土）最期まで住み慣れた地域で暮らし続けるために—在宅医療や介護 で受けられるサービスを知ろう 総）柴崎先生 70名 2. 予算執行状況について 3. 平成30年度杏林CCRCフォーラム、公開講演会について 4. COC+ 外国語学部「フィールドスタディⅣ（相馬）」について 5. COC+ 出張報告について 6. COC+「いわて創造人材育成プログラム」への科目提供について 7. COC+ 岩手県出身学生就職状況について 8. COC+ 平成31年度補助金調書に係る予算について 9. COC+ 平成31年度補助金調書に係る新規取組調書の提出について 10. COC+ 平成29年度補助金に係る額の確定調査について（2 /14） 〈協 議〉 1. 人事関係について（地域交流推進室） 2. 平成31年度杏林CCRC指定研究について 3. 平成31年度地域活動助成費【研究】の募集について 4. COC+ 平成31年度補助金調書の作成について 5. COC+ 平成30年度実績報告の作成について

COC+実績報告④

地（知）の拠点整備事業
平成29年度事業にかかる第三者評価報告書

I．第三者評価委員会の開催概要

- 日時：平成30年10月26日（金）10：30～12：00
- 場所：杏林大学 井の頭キャンパス C棟 5階 応接室
- 出席者：第三者評価委員（敬称略）：
委員長 井藤 英喜（（地独）東京都健康長寿医療センター 理事長）
委 員 中村 秀一（（一社）医療介護福祉政策研究フォーラム 理事長
国際医療福祉大学大学院 副大学院長）
委 員 関谷 博（羽村市社会福祉協議会 顧問）
杏林大学：
大瀧 純一（学長）
古本 泰之（地域交流推進室長）
長島 文夫（杏林CCRC研究所長）
依田 千春（地域交流課長・大学COC事業事務主担当）
- 評価資料：（1）地（知）の拠点整備事業申請書
（2）平成29年度大学改革推進等補助金調書
（3）平成29年度実績報告書
（4）平成29年度事業成果報告書
（5）平成29年度杏林CCRC研究所紀要

II．第三者評価報告書

平成29年度事業報告をもとに、第三者評価委員から以下のように事業成果に対する評価、意見、助言を受けた。

1．平成29年度における報告事項

教 育

平成27年度から実施している『地域と大学』では授業内での4学部合同授業を実施し、平成29年度をもって、全学年がこの科目を受講完了した。科目終了後のアンケートでは、全体で95.8%の学生が「連携自治体の現状・課題を把握した」と回答した。また、87.4%の学生が「問題解決力が身についた」と回答し、72.7%の学生が「継続した地域活動を実施したい」と回答した。社会貢献活動を含めた課外活動数は年々増加傾向にあるが、「地域と大学」のような地域志向科目の受講は学生の地域課題に関する意識を高め、連携市等の活性化のために各自の学びを還元する好循環の創出の一助となった。

平成29年度は、外国語学部において初めて岩手県釜石市での『フィールドスタディⅣ』を実施したように、大学COC+事業を意識しつつ、大学COC事業の最終年度として全学的に地域志向科目の充実を図り、外国語学部、総合政策学部を中心にプロジェクト演習系の科目を継続的に開講した。

研 究

平成29年度は合計24回28講演の公開講演会、連続講座を実施し、総受講者は3,088名であった。平成27年度時は1,245名、平成28年度時は2,073名だったことを踏まえると、希望者が大

幅に増加していることが分かり、「知の公開」が進んだ。特に「健康寿命延伸」に関わる講演は人気が高く、希望者が会場に入りきらなかったというケースもあった。

杏林CCRC研究所における地域志向教育研究としては、『持続可能な少子超高齢化社会像の構築：日本版CCRCに関する考察』をテーマに実施し、平成30年1月13日に公開シンポジウムを企画開催した。本シンポジウムでは、岩手県八幡平市で日本版CCRCである「オークフィールド八幡平」を運営する山下直基氏を招き、『老後の衣食住』と題し、日本版CCRCの概念と課題等について講演していただいた。これからも大学COC+事業との接続を視野に入れ、連携できる活動を継続していく考えである。

平成30年3月に『平成29年度杏林大学杏林CCRC研究所紀要』を発行し、連携する3市とその関係機関、医療機関等を中心に郵送配付した。また、ウェブサイト上にも掲載した。地域志向研究の成果を論文としてまとめるほか、研究所の諸活動の報告などを紀要として文書化して公表することで、知の普及と蓄積に努めた。

社会貢献

生涯学習の機会提供として実施している「生きがいづくりコーディネーター養成講座」には、連携自治体より15名の受講者が参加し、修了式において10名に履修証明書を授与した。授業を地域に開放し、地域住民と学生が学びあう場を設けた

ことで、地域住民には地域のニーズに応じた人材を育成する「学び直しの場」を提供することができたとともに、地域志向教育を受ける学生たちにとっては受講者から地域の生きた情報を得ることにもつながった。

この講座が定着しつつある実例として、受講者同士が自主的に集まり、三鷹市内の空き家を改装して、多世代間交流の場として「おむすびハウス」を立ち上げ、各種イベントを計画・運営しながら、地域貢献活動を行っている。このことから、「生きがいづくりコーディネーター養成講座」の開講は、学び直しの機会提供だけでなくとどまらず、地域と大学をつなぐための取り組みとしても大きな役割を果たしていると言える。

この講座には全体として概ね高い評価ができるが、年々増加する2回以上の受講希望者への対応策は課題だと言える。

「災害に備えるまちづくり」、「生きがい創出」、「健康寿命延伸」をテーマとして、様々な活動が行われ、多くの教員と学生が参加した。特に、「災害に備えるまちづくり」のBLS指導活動は、救急救命学科の教員と学生が地域に出向き、市民との交流を通して救命活動技術の普及に努めた。

羽村市においては、市内中学生約500名に指導を実施しており、こうした活動をこれからも継続してほしいと市から期待されている。

この取り組みは、大学として地域社会に寄与するだけでなく、学生自身の社会貢献に対する意識の向上が図られ、同時に教育面において技能向上にも結びついた。市民からも感謝の言葉が多く寄せられており、来年度以降も継続して行いたい。

2．第三者評価委員会による総評

5年間における大学COC事業の取り組みについて、総合的に見ると、活動の迅速な実施を通じて各自治体とは安定した連携が出来ている点が高く評価できる。事業終了後も、連携する3市とのつながりをより確固たるものにしていくためには、市民がいつでも相談できるような窓口を持ち、行政とともに考えていくという姿勢を表す体制をつくることが求められる。例えば、羽村市は連携する自治体の中でも特に規模の小さい市なので、杏林大学専用の対相談窓口を市に設け、市民からの意見にすぐに反応できるような体制づくりを検討して、軌道に乗った段階で他2市にその方法を応用することも可能だと思われる。

行政と市民と大学の繋がりをスムーズにするための体制づくりは、これからのCOC+事業においても有効に機能していくだろう。また、羽村市などの小規模な市は、調査・研究のフィールドとしても活用しやすいので、大学が様々な事業に協力する代わりに、市の持つデータ等を研究に向けて提供してもらえるような体制を整えることで、「知の拠点」としてさらなる発展が期待できる。

「生きがいづくりコーディネーター養成講座」については、地域とのつながりが希薄になりがちな世代に対する「居場所づくりの提供」ともいえる良い取り組みになっているので、今後もこのプログラムは継続して行ってほしい。問題点をあげるとすれば、「養成」には注力している一方で、「講座修了後のイメージ」の受講者への提供が不足しているように感じた。

受講を希望する市民というのは、自主的にスキルを伸ばしたいと考えながらも、大学が距離を置きすぎると活発さを失ってしまう傾向にある。そこで、連携市をうまく活用して、講座修了後は活動の場を大学から市内へとシフトさせ、修了者が市内において独自に活動を始めることが出来るように、講座申込時からビジョンの提示を行うことが重要だろう。

2回以上のリピーター受講者については、講座から得た知識や経験を地域に還元することを意思表示してもらうなどの工夫を加えると良いのではないだろうか。講座名を変更することも対策のひとつになると思われる。

公開講演会や連続講座について受講者数の大幅な増加が見られたことは、内容や周知方法に工夫と改善を重ねた結果であると言える。他大学などにおいて、講演会を実施するもなかなか集客に結びつかない現状を考えると、大いに評価できる数値である。杏林大学は、総合大学として医療・保健系のテーマから政治・経済に関わるテーマまで幅広い知識を提供することが可能であるから、この好条件を利用することで、地域社会における位置づけを高めることが出来るだろう。

平成27年度から連携を進めている岩手県との取り組みについては、COC+事業において取り組んできた従前のプロジェクトを踏まえて実施した「いわて・杏林交流プロジェクト」の企画・運営が評価できる。

外国語学部の選択科目として、岩手県釜石市を舞台に展開した「フィールドスタディⅣ」では、学生に釜石市の現状を実地で学ぶ機会を提供したことによって、岩手県の抱える東日本大震災後の地域課題を肌で感じる事ができたほか、これからの復興のあり方についても考えを深める良いきっかけになったのではないかい。

釜石市をはじめ岩手県の各自治体では、震災以降の援助に対して非常に敏感になっていることから、COC+事業の終わりを本学との関係の終了にするのではなく、この関係をさらに進歩させ、岩手県内においても杏林大学の存在感、価値を高めることが求められる。



第三者評価委員会

平成30年度 杏林大学 地域交流活動報告書

発 行 日 令和元年9月

編集発行 杏林大学 地域交流推進室

〒181-8612 東京都三鷹市下連雀5-4-1

TEL：0422-47-8052 FAX：0422-47-8054

<http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/society/area2/>
